
ハイスクールD×D 兵藤家の妹?

秘密の君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D 兵藤家の妹？

【Nコード】

N6834Z

【作者名】

秘密の君

【あらすじ】

兵藤家に妹がいたらどうなっているのか、と妄想して書いてみました。処女作なので、至らぬ点が多く、お見苦しい部分も多いと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

1・とある兄妹の朝の風景（前書き）

はじめまして。秘密の君です。

今回は、今まで妄想どまりだったネタを使ってみたく始めました。
更新はなるべく早く書くようにします。

主人公は兵藤 毬（16）です。

それでは、私が作り出した「ハイスクールD×D」の世界をお楽しみください。

1・とある兄妹の朝の風景

「眩しい・・・」

私はベッドの上でつぶやいた。朝日がとても眩しい。

とりあえず、ベッドから降りていつも通りお兄ちゃんを起こしに行く。

お兄ちゃんの部屋のドアを開け放つ。

「お兄ちゃん。あつさだよ。」

「ん・・・あと5時間。」

「学校遅れるよ。」

反応がない。

「仕方がないな。」

そう言っ私は部屋のいたるところに隠してある工口本を取り出し、
「さて、捨てよう」今起きたすぐ起きた！！だから慈悲を（泣）

「いつもこうやらないとお兄ちゃんは起きないんだよね（笑）」

「わかったから、なかないですよ」お兄ちゃん？

私はウインクしながら言う。そうするとお兄ちゃんは安堵の息を吐いて

「いつも思っんだが、毬はどうやって見つけてるんだ？」

「ふっふっふっ。お兄ちゃんの隠し事なんて私の前では無意味なのだよ！」

「な、なんだって・・・！」

実は、盗聴器と隠しカメラを設置しているだけなんだけどねー。そのとは知らずに

「何ということだ・・・。では、どうすれば・・・。ぶつぶつ・・・。とお兄ちゃんつぶやいている。」

「早くしないと遅れるよ。」

「ああ、そうだな。」

と、お兄ちゃんと一緒に一階に降りる。あ、そうだ。

「お兄ちゃん。今度の休日買い物つきあってくれない？」

「あゝ。ごめん！俺その日デートがあつて……。」

ビシッ。と、私の周りの空気が凍る。そうとも知らずお兄ちゃんは話を続ける。

「いやゝ。この前告られてさ。すつつつつつげええ嬉しくて即OK出しちゃったよ。ハハハ。」

お兄ちゃんはすぐうれしそうだ……。うん。決めた。

「その人の名前教えてくれないかなお兄ちゃん。」

「ええつとな、天野 夕麻ちゃんつうんだ。」

ふゝん。ちゃん付け……。よし。

「殺そう。」

「いきなり何言つてんだ！？」

しまった。つい声に出してしまった。

「大丈夫だよ。その人とは永久に会えなくなるだけだから。」

「いやいやいや。大丈夫じゃねーだろ！？落ち着け早まるな！」

「お兄ちゃんをたぶらかす悪魔に死の鉄槌を……。」

「頼むから、頼むから落ち着いてくれ！俺の初恋なんだ。奪わないでくれ！頼むから！」

私はその言葉に泣きたくなった。

「うう……。。」

「えっ！？あゝ。ごめんな……。 (よくわかんが謝るのが吉とみた！)」

「ぐすつ……。 お兄ちゃんはその人のこと大好き？」

「え？あ、ああ。」

そんなに思ってるんだ。じゃあ仕方ないね……。

「うん。わかった。少しパニックただけだから……。」

「そ、そうか（元気なくなってるな……。そうだっ！）じゃあ今度一緒に買い物行こうぜ！」

「えっ？」

「だからさ元気出してくれよ。な？お前が悲しそうな見たくねえんだよ・・・。（理由はわからんが・・・。）」

たぶん、原因が自分だって気付いてないんだろうな・・・でも・

・
「うんわかった。」

心配してくれたし嬉しいからいいつか。

「でも、譲りはしないからね・・・。」

だったら、こっちに振り向かせるまでのこと!!

「ん？なにぶつぶついってるんだ？」

「な、なんでもない！（汗）」

「？」

よかった気付かれなかった。

「さてそろそろ行くか。」

「あつ。待つてお兄ちゃん！」

そうして私たちは学校へ向かった。

私たちの運命の歯車はこの日を境に狂ってしまった。

1・とある兄妹の朝の風景（後書き）

毬「少し…寂しいな。」

君「まあ。落ち着いて。」

毬「で、次回はお兄ちゃんと彼女さんのデートの話なんだよね?」

君「さあてね。（怪しい笑み）」

毬「え!? 違うの!? どうなるのよー!?!?」

君「次回、『闇に伏せる兄妹』お楽しみに」

毬「こたえろー!」

2・闇に伏せる兄妹（前書き）

さて、2話目です。

そこまで進んでいません。

できたら、感想などをお願いします。

2・闇に伏せる兄妹

学校前、いつもどおりにお兄ちゃんと登校していると、

「よう！一誠。」

「おはよう。一誠。」

「よっ。」

「おはようございます。」

いつもお兄ちゃんをつるんでエロ三人組と呼ばれる人たちだ。

「一誠。エロDVD貸してやるよ。約束だっただろ？」

そう言つて、鞆からDVDを堂々と白昼にさらす。

この品性を感じられないこの丸刈り頭はお兄ちゃんの友人の松田君。まあ、よく騒ぐ人だ。

・・・悪い意味で。

「今日は風が強くてロリ少女のパンチラが拝めた・・・。生きててよかったよ。」

と言つて、中指で眼鏡をずり上げる。

人間として危ないと思うこのカッコつけて話しかけてきたのはこれまたお兄ちゃんの友人の元浜。

メガネを通して女性を見ると体型を数値化できるらしい。

私もされそうになったことがあったな。もちろん、瞬殺したけどね。実は、私は運動神経抜群なんだよね。陸上部の男子に短距離走で勝ったこともあるし。

「ああ。いいやいらね。」

「なんだと！？エロさNo.1のお前が・・・体調悪いのか！？」

「そうだぞ？お前おかしくなったか？」

「ちげえよ！！彼女ができたから要らんっただけだ！」

「・・・」

二人が黙ってしまった。あ、耳ふさいど。

「「な、何だとーーーー！！！！」」

ふさいでもこの威力。どっからそんなに声が出てくるのだろうか？
お兄ちゃんは・・・あ、くらくらしてる大丈夫かな？

「ばかな！エロさNo.1のお前がそんな馬鹿なー！！」

「神はいない。神はいなくなってしまうんだ・・・」

と二人ともorz状態になってしまった。

信じたくないんだろ？な。あ、教室ついたし授業の準備しようっと。

「まあ、負け組は負け組らしく吠えてやがれ。はっはっはっ。」

「「死ね！！！」」

廊下で騒いでいる。うるさいなあ。

さてと授業授業っと。

（休日）

お兄ちゃんのデートをつけてみたけど、お兄ちゃんの彼女は意外にもかわいい子だった・・・。

確かにあれなら惚れても仕方ない気がする。

お兄ちゃんのこと奪えるかなあ・・・。

あれ、公園に入った。何するんだろう？

・・・はっ！まさかキス！？それは許さん私が許さん！

私は公園の茂みに隠れてすぐに妨害できるように準備した。

二人の声が聞こえてくる。

「ねえ、死んでくれないかな？」

・・・は？何言ってるのあの子？私の聞き間違いかな？

お兄ちゃんもそう思ったらしく、

「・・・え？ その・・・あれ？ ゴメン、もう一度言ってくれない？

ちよつと緊張してて聞き取れなかったよ、はっはっは」

「死んでくれないかな？」

バサッ

お兄ちゃんの彼女の背中に黒い翼が生える。
まるで、黒い天使の翼みたいなものが。
そう考えていると彼女の手に光る槍？のようなものが握られていた。
それを無造作にお兄ちゃんに投げつける。

グサツ

お兄ちゃんのおなかにその光る槍が刺さる。

「「えっ？」」

お兄ちゃんの声と私の声がハモる。

私は自分でも気付かない間にお兄ちゃんの近くに駆け寄っていた。

「お兄ちゃん・・・？」

返事がない。

お兄ちゃんのおなかから赤い液体がドクドクと流れ出る。

「いつ、嫌————！！！！」

「あら？あなた彼の妹さんだっけ？」

夕麻という彼女が話しかけてくる。

ふざけるな・・・。

ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな

「ふざけるなあ————！！！！」

お兄ちゃんの・・・敵！！！！

私は飛びかかろうとする。

「殺す……。殺してやる!!」

「あはつ。残念、それ無理。」

彼女は笑顔でそう言い光の槍を投げつけた。
かわせない。

グサッ

「ごふつ……。」

やられた……。?でも、倒れない。倒れてやらない!

「あら?立っていられるなんてすごいわね。でも、もう無理でしょう?うふふ。」

そう言つて彼女は闇の中に消えていった。

その声を聞いて私の意識は遠のいた。

その瞬間、私の視界に紅の髪が入った。

そして声が聞こえた。

「死にそうね、傷は……。へえ、おもしろいことになっているじゃないの。あなたたちがねえ……。おもしろいわ」

意識はそこで遠のいた。

そして私はその日、人間の死を迎えた。

2・闇に伏せる兄妹（後書き）

毬「え！？死んじやったよ！私達死んじやったよ！？」

君「そうだね。（にやにや）」

毬「え？何？何なの？」

君「まあ、次回を楽しみに・・・。」

毬「すごく気になるのにー！」

3・兄と妹との魔の道（前書き）

さて、一日の内に三話目を更新することができました。

まあ、いつもの如くあまり進んでないんですがね。

明日にはオカルト研究部のところまで行きたいな・・・。

3・兄と妹との魔の道

マリside・・・

「う・・・ん・・・」

私は目覚まし時計の音で起きた。

いつもはすぐにおきれるのに、近頃は朝がめっぽう弱くなった。
何でだろう？

「さてと、ほんとに起きないと。お兄ちゃんも朝がさらに弱くなつたし。」

そう呟きながら、私はお兄ちゃんの部屋へ向かった。

昨日はエロ三人組のメンバーと一緒に何かやっていたらしい。

何をやっていたかは簡単にわかってしまうのが少しかしいけどね・・・。

ずいぶんと夜遅くまでいたらしいからいつ帰ってきたかわからなかった。

「おつはよー。お兄ちゃん？」

私はお兄ちゃんの部屋のドアを開け放った。

そして見てしまった。

裸のお兄ちゃんと紅髪（あかみ）の女性を。

イツセーside・・・

き、聞いてくれ！俺酒飲んだりしてなかったはずなんだ。（当然の如く）

それなのに、隣に俺の憧れの女性、リアス・グレモリー先輩が寝ていたんだ！

う、嘘だろ・・・。記憶にないのに俺は初体験してしまったのか！？

「な、何たる不幸・・・」

「ん・・・」

ああー！どうしよう！

「ん・・・。あら、あなたもう起きてたの？」

っ！！お、お姉さま！お胸が見えていらつしやるのですが！？

俺は毛布で下半身を隠しながら床に座った。

「あ、あの、お胸が見えていらつしやるのですが？」

「あら、見たければ見てもいいわよ。」

っ！！なん・・・だと・・・。

日本語にそんな素敵な言葉があつたのか！？

鼻血が出そうだ。

「で、でもなぜここにいますか？」

「あなた、昨日のこと覚えてない？」

え？昨日のこと？

確か、悪友二人と一緒にエロDVDと一緒に見てて、なぜ俺らに彼女ができないのか、という話になり時間が遅くなって、一人で帰り道を歩いていて・・・

「確か、変な男とあつて・・・そうだ！夕麻ちゃんと同じような翼が生えていて、俺の腹に光の槍みたいなものを・・・。って、あれ？傷は？」

「私が駆け付けなかったら、あなたは今頃無となっていたわよ。傷は深かったから私がここまで運んで魔力で治してたってわけ。」

「そ、そうなんですか？て言うか何で裸なんですか？それにあの男は何者なんですか！？」

「えーと。まず前者の質問。魔力が裸のほづが渡しやすいため。で、後者の質問は、あいつらは堕天使。

欲に負けて天使から堕ちたもの達よ。」

な、何を言ってるんだこの人は！？

「まあ、詳しいことは学校で話すわ。後で使いを出しておくから。」
先輩がそういった瞬間俺の部屋のドアが開け放たれ、

「おつはよー。お兄ちゃん？」
と言いながら毬が入ってきた。

ビシッ

その瞬間、空気が凍った。

リアス先輩は気にしていない様子だが毬のほうからドス黒いオーラの様なものが、

（や、やばい……。）

俺は俺のように冷や汗をかいている。

「お兄ちゃん。かのひとはだれかなあ？そして何をしていたのかなあ？（怒）」

「ひつ。い、いや毬落ち着け。な？」

「私はリアス・グレモリー。あなたたちと同じ私立駒王学院の三年よ。それに裸で抱き合っていただけよ。」

せ、先輩！色々とはしより過ぎです！

ああ、毬からさらに黒いオーラが！

「こんの……。どろぼうねこがあーーーー！！！！！！！！！！」
ま、毬が先輩に襲いかかっている！危ない！！

ヒラリ。

「へぶっ」

おお、先輩は華麗にかわしている！

そして毬はベッドに頭から突っ込んでいるぞ！

「あなたたちに言っておくわよ。」

「何だ！この泥棒猫！！」

「お、落ち着け毬！」

俺は毬を羽交い絞めにした。そうしないといつ飛びかかるかわから

ないからな。

先輩は制服に着替えた後、驚くべきことを言った。

「あなたたちは、一度死んでるわ。転生して悪魔になったのよ。」

3・兄と妹との魔の道（後書き）

毬「何よこの泥棒猫！！ガルルル・・・」

君「ま、まあ。落ち着きたまえ。（ダラダラ）」

毬「お兄ちゃんの貞操を・・・許さない・・・。」

君「まあ、あまりにも怖いので次回予告『悪魔達の喧騒』」

毬「お楽しみに？ あの女・・・ぶち殺しかくていね♪」

君「ひいっ」

4・悪魔達の喧騒（前書き）

さてついに毬の神器が姿を現しました。

いつもより多く描いたの絵少し疲れています。
今日中にもう一話いけたらいいな

4・悪魔達の喧騒

マリス side・・・

・・・は？

何を言ってるのこの人？頭がおかしくなったの？

お兄ちゃんもどう反応すればいいのかわからないのかポカンとして
いる。

私たちを気にせずにリアス先輩は、

「まあ、さつきも言っただけけど、詳しいことは学校でね。」

と、言いながら鞆を持つ。

「あなた達、早くしないと遅れるわよ。」

あ・・・、

「ヤバイ！早くしないと遅れちゃうよ。お兄ちゃん！」「お、おう
！そうだな。」

そついいながら、私たちは急いで準備をする。

この後、一階でお母さんとお父さんが騒いだのはいうまでもない。

「「いつてきまーす。」」

そう言つて、私たちは玄関から飛び出ていった。

・・・あの泥棒猫もいたけど。

（学校）

まあ、登校中もいろんな人が騒いでいた。

エロ三人組のメンバーの二人ももちろんからんできた。

お兄ちゃんはその二人に意味ありげな笑顔で、

「なあ、生乳って見たことあるか？」

と言っていた。

あの女・・・。

どうしてくれようか・・・。

そうだなあ、まずは気絶させてそこから色々と世間に公表できないようなことをしまくって・・・。

「セメント・・・太平洋沖・・・沈める・・・ブツブツ・・・」

「お、おい毬さん？どうしてそんな危険なフレーズをつぶやいてるのでせうか？（ビクビク）」

あれ？気付くと私の周りからみんな2メートルくらい離れてこちらを見ている。

お兄ちゃんもその中にいたので、

「どうしたのお兄ちゃん？」

私は最上級の笑顔で聞いてみる。

「あ、ああ。よかった。いつもの毬だ・・・。」

とお兄ちゃんは、安堵の息をついている。

どうしたのかな？

そのまま学校に着いた。

あの泥棒女はさっさと行ってしまっていなくなってたんだけどね。

イツセイ side・・・

さっきの毬は阿修羅に見えてしまった。

本当に怖かったな・・・（汗）

まあ、そんなこんなで今は放課後になってしまった。

先輩が言っていたことが気になって、授業がまともに頭に入らなかった。

しばらく待つと、

「兵藤 一誠君と、毬さん。いるかな。」

声のしたほうを向くとうちの学校で人気のイケメン木場 祐斗がたっていた。

うちのクラスの女子がいろいろと騒いでいる。

「「「「「キヤー！木場くううん！」「」「」」」」」

くそっ、イケメン死ね！！

俺はとりあえず木場のもとへ向かった。

マリスィデ・・・

木場という人が私たちを呼んでいた。多分、リアス先輩の使いとは彼のことなのだろう。

お兄ちゃんは、

「何のようだ。」

と実に、不機嫌そうに木場君に話しかけた。

お兄ちゃんはイケメン嫌いだからね。

木場君は気分を害した様子はなく、

「ええとね、リアス・グレモリー先輩の使いで「OK、OK。すぐ行くよ」

お兄ちゃん・・・。そこまで先輩のことがいいのかな？
どうすればいいかな・・・あの女からこっちに振り向かせるためには？

とりあえず、木場君の後をついて行くと、

「汚れてしまっわ、木場君！」

「木場君×兵藤なんてカップリングは許せない！」

「あの女木場君と・・・ブツブツ」

と、腐った視線と殺意がこもった視線が私たちに向って放たれている。

木場君と私は無視しているが、お兄ちゃんはゲッソリしている。

理由は腐った視線のせいだろう。

しばらく歩いていると洋館みたいな建物が見えてきた。

「ここに部長がいるんだよ。」

そう言いながら中に入っていく。

上に看板の様なものがあり、オカルト研究部と書かれていた。

中には、映画に出てくるような魔術の道具やら、魔法陣が書かれて

いた。

さらにソファー、デスクがいくつかあり、ソファーに誰かが座っていた。

ん？あれって確か・・・思い出した。

「ども・・・」

と言いながら手に持った羊羹を食べていた。

確か名前は塔城 子猫さんだったはず・・・。

「こんにちは。」

と私は笑顔であいさつし返した。

そういえば、さっきからシャワーの音がする。

よく見てみると部屋の中にシャワーがありタオルの向こうから誰かが浴びているのが見える・・・。

・・・っは！？しまった！お兄ちゃんが凝視している！

とりあえず私は急いで目隠しをした。

向こうから話し声が聞こえる。

片方はあの女だが、もうひとつは確か姫島 朱乃先輩だったかな？

そして二人とも出てくる。

私はお兄ちゃんの目隠しをとる。お兄ちゃんは少し残念そうな顔を
して、

「毬、何で目隠ししたんだ？」

と聞いてきたので、

「お兄ちゃんが、いやらしい目つきしてたから。」

そう言つと子猫さんが同意するようにウンウンとうなずいていた。

「あらあら、はじめまして、私、姫城朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを。」

と笑顔であいさつされた。

「さて、もう知っているとは思いますが私はリアス・グレモリー。

この部の部長よ。」

そう言つと、

「これで全員そろったわね。兵藤 毬さん。一誠君。いえ、マリと

イツセーと呼ばせてもらっわ。」

「は、はい。」

「はい。」

まあ、別にどう呼ぼうとかまいませんが・・・

「私たちは、あなた達を歓迎するわ。」

「え、あ。はい。」

「はい。」

お兄ちゃんは、たどたどしく答えるので精一杯らしい。

そう考えていると、

「悪魔としてね。」

爆弾発言をされた。

イツセーside・・・

そのあと、朱乃さんから、お茶をもらい、色々な話を聞いた。

なんでも、堕天使と悪魔は地獄の覇権を争っているとか、堕天使と悪魔を問答無用に襲いかける天使。

しかも女子と付き合っているとか夢が本当だったとか。

しかも、女子と付き合っていた子が堕天使とか、俺たちが殺されそうになったのは神器を持っていたから。

昨日襲われた話を聞いたとき、毬が

「お兄ちゃんを殺そうとするなんて・・・万死に値するねそいつら・・・。」

と、少し危ない発言をしていた。

皆さんが少し驚いてるよ。

「ブツブツ・・・。」

毬は何かつぶやいている。その中、

「ねえ、イツセー。マリどうしちゃったの?」

と、聞いてきた。

あ、そう言えば言い忘れてた。

「いえね、毬は昔から俺に何かあるとあんな感じになっちゃうんですよ。」

「そうなの……。話を戻してもいいかしら、マリ？」

「ブツブツ……。え！？あ、はい。すいません。」

次に神器について説明された。なんでも、俺達の中に宿っているという規格外の力らしい。

「で、神器を発動させるためには、その人が一番強いと思う物の姿をイメージするの。イッセーやってみて。」

一番強い姿か……。やつぱり、

「一番強い存在……。ドラグ・ソボールの空孫悟かな……。」

「じゃあその姿を真似してみて。」

「え！？今ここですか？」

「そうよ。」

な、なんてこった……。この年になってドラゴン波を撃つ真似しなけばならないなんて……。

「は、はい。じゃあ……。」「

俺はドラゴン波の格好をした。

「そのまま一気に力を解放するようにやってみなさい。」

「いきます。ドゥラゴン波ーーーー！！！！！」

叫んでやったぜ。

ん……。？うおっ！？なんだ俺の腕が光ってる！

「それがあなたの神器よ。」

これが……。俺の左腕に赤い宝玉の付いた赤い籠手のようなものがあつた。

「マリ。あなたもよ。」

えっ！毬にも神器があつたのか！？

毬もびつくりしたような顔をしている。

「マリ。イッセーがやったようにやってみて。」

「は、はい。」

そう言いながら、毬は俺と同じような恰好した。
あれ？毬ってドラグ・ソボールくらいじゃなかったっけ？
そう思っていると、

「あら、マリ。イッセーと同じポーズなのね。」

「いえ、少し違います。」

え、何が違うんだ？

「何が違うの？」

部長もそう思っただけ。

「これはお兄ちゃんが最強と思ったポーズを最強と考えてポーズをとっているの、はつきり言えばお兄ちゃんのまねです。」

「そ、そうなの・・・。」

少々びつくりしてしまった。

だって、俺より強い毬が、俺を最強っていうんだぜ。驚かなくてどうする。

「いきます。ドゥラ〜ゴ〜ン〜波~~~~~!!!!!!」

そう叫んだ瞬間、毬の体が光に包まれた。

マリside・・・

うわっ。びつくりした。

私の体が光に包まれた後、私の両手首、両足首、首に十字架の様なアクセサリーが付いていた。

「これが、私の神器？」

そう言っていると、みんな私から離れていた。

「えっ!?!どうしたんですか？」

みんな、すごい険しい顔をしている。

「ねえ、マリ」

「は、はい。何ですか？リアス部長？」

部長が恐る恐る聞いてきた。

「あなた、体に異変とか無いの？」

「へ？ありませんけど・・・？」

「そうなの？おかしいわね・・・。」

「あのどうかしたんですか？私。」

そんなに真剣になられると逆に怖い。

そう思っていると、朱乃先輩が、

「悪魔にとつて、聖なる道具という物は弱点の様なものなのですね。十字架も悪魔には触っただけで激痛を及ぼす代物のはずなのですが・・・。」

つまりは、私は神器とはいえ十字架を触れて激痛を感じないおかしい状態にいます・・・。

「ヤバいんですかね・・・？私。」

少し怖くなってしまった。すると、お兄ちゃんが私の首に付いている十字架のネックレスに触れてきた。

「お、お兄ちゃん！？」

「部長。俺が触っても激痛起きませんし、この十字架が特別なだけなのではないでしょうか？」

お兄ちゃんがそう言うのと、

「そうなのかしら？でも、そうなのかもしれないわね。」

とみんな納得してくれた。

「ありがとう。お兄ちゃん？」

ところで、

「そう言えばどうしてリアス部長は私たちが死んでるって気付いたんですか？」

そう聞くと、

「それはコレのおかげよ。」

と、一枚の紙を取り出した。

その紙には、こう書かれてた。

『あなたの願い叶えます！』

そんな謳い文句と奇妙な魔法陣の描かれたチラシだった。

「これ、私たちが配っているチラシなのよ。これは、私たち悪魔を

召喚するためのもの。最近魔方阵を書くまでして悪魔を呼ぶ人はいないにの。こうして、チラシとして、悪魔を召喚しそうな人間に配っているの。あの日私たちの使い魔が繁華街でチラシを配っていたの。それをイッセーが手にした。そして、堕天使攻撃されたイッセーは私を呼んだの。私を呼ぶほど願いが強かったんでしょね。普段なら眷属の朱乃呼ばれるんだけど」

そうだったんだ・・・。

「召喚された私はあなたを見てすぐに神器所有者で堕天使に害されたのだと察したわ。イッセーとマリは死ぬ寸前だった。そこで私はあなたの命を救うことにしたの。悪魔としてね。あなたは私の眷属として生まれ変わったわ。」

へえゝなるほどね。

「じゃあ、ひと段落ついたところで、改めて、紹介するわね。裕斗」

「僕は木場裕斗。イッセー君とマリちゃんと同じ二年生ってことはわかってるよね。僕もあくまで」

「・・・一年生。・・・塔城子猫です。・・・悪魔です」

「三年生、姫島朱乃ですわ。今後もしろしくお願いします。これでも悪魔ですわ。うふふ」

「そして、私が彼らの主であり、悪魔であるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、マリ、イッセー」

その言葉に私たちは、

「「はいっ！！」」

と大きな声で返事をした。

4・悪魔達の喧騒（後書き）

毬「私の神器おかしいじゃない！作者どうしてくれるのよ！」

君「おいおい、それは間違っている。」

毬「それはどう意味よ！」

君「それはまたいつか。次回『悪魔とシスター』悪と聖が交わりと
き物語は始まる。」

毬「パクってんじゃないわよ！！！」

君「へぶっ」

5・悪魔とシスター（前書き）

aaaaです。

いやー酷い!!

さらに入たくそになった気がします。

5・悪魔とシスター

Mariside・・・

「さて、紹介も終えたし次は悪魔について詳しく話そうかしら。」
リアス部長は、そう言うのと私たちを見て、

「まず、悪魔の中ではあなた達は転生悪魔の部類に入るの。たいていは下僕としてひどい扱いを受けてしまうわ。私はそのような扱いにはしないけどね。」

「なぜですか？」

そう聞くと、部長の代わりに木場君が答えてくれた。

「それはね、部長の家のグレモリー家は悪魔の中では少ない眷属を大切にする悪魔なんだ。だから、僕たちはこの人に会えてよかったと言えるよ。」

「へえーそうなんですか・・・。」

じゃあ私たちはラッキーなんだ。

少しうれしいな♪

少し浮かれていると

「でもね、悪魔には階級があるの。爵位っていうのがね。私も持っているわ。これは生まれや育ちにも関係するけど、成り上がりの悪魔だっているわ。最初は皆、素人だったわ」

あ、やっぱりそうなんだ。みんな1からのスタートなんだね。

お兄ちゃんは不服そうにしていると、
「やり方しだいでは、モテモテな人生も送れるかもしれないわよ？」
と、リアス部長が爆弾発言をした。

もちろんお兄ちゃんは、

「どうやってですか!？」

即座に反応した。あまりの反応の速さに、反射の域にいつているね。皆、お兄ちゃんの反応の速さに少し驚いていた。

リアス部長は、

「純粹な悪魔は昔の戦争で多くが亡くなってしまったのよ。そのため、悪魔は必然的に下僕をあつめるようになったの。まあ、以前のような軍勢を率いるほどの力も威厳も消失してしまったけれど。それでも新しい悪魔を増やさないといけなくなった。悪魔にも人間同様に性別はあるから悪魔の男女の間に子供は生まれるわ。それでも自然出産で元の数に戻るには相当な時間がかかってしまうの。悪魔という存在は極端に出生率が低いから。それでは墮天使に対応できない。そこで素質のありそうな人間を悪魔に引き込むことにしたわけ。下僕としてね」

と続けた。

あれ？結局下僕じゃないですか。

お兄ちゃんもそう思ったらしい。

「もう、そんな残念な顔をしないで。話はここから。ただそれでは下僕を増やすだけで力のありそうな悪魔を再び存在させることにはならない。だから、悪魔は新しい制度を取り入れたわ。力のある転生者——つまり、人間から悪魔になった者にもチャンスを与えるようになったのよ。力さえあれば、転生者でも爵位を授けよう——と。そのせいもあって、世間に割と悪魔は多いわ。私たちがみたいに人間社会に潜り込んで行動している悪魔も少なくないしね。イッセーやマリも知らず知らずのうちに悪魔と町中ですれ違っていたと思うわえ！？そうだったの！？私も気づかず悪魔とすれ違っていたりしたんだ。

少し怖い……。

「ええ。もっとも、認知できる者とできる者がいるわ。欲望が強い者や悪魔の手でも借りたいほど困っている人間は悪魔に強く認識しやすいわね。そういう人たちに魔法陣つきのチラシを配ると私たちは召喚されやすいのよ。悪魔を認知できても、先ほどのイッセーのように私たちの存在を信じない者も多いけど、魔力を見せれば大抵は信じるわ」

そうかもね。私はすぐ信じたけど。

「じゃ、じゃあ！やり方次第では俺も爵位を！？」

「ええ。不可能じゃないわ。もちろん、それ相応の努力と年月がかかるでしょうけど」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！」

うわっ！いきなり叫んでびっくりするじゃん。

「どうしたのお兄ちゃん？」

でもお兄ちゃんは、聞こえてないらしく、

「マジか！俺が！俺がハーレムを作れる！？エ、エツチなことしてもいいんですね！？」

お兄ちゃん……。そこまでだと、流石にひくよ。私でも。

「そうね。あなたの下僕ならいいんじゃないかしら」

あ！リアス部長！火に油を注がないで下さいよ！

お兄ちゃんが止まりそうもなくなってきた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！悪魔、最高じゃねえか！何、これ！何、これ！チョーテンション上がってきたよ！いまなら秘蔵のエロ本も捨てられ——」

「え！本当！じゃあ早く家に帰って、捨て「いや、エロ本はダメだ。アレはダメだ。俺の宝だ。お袋に見つけられるまではやっていける！それとこれは別だ。うん、別だ！だから捨てない！前言撤回！」

ええー。」

せつかく、あのHな本を捨てたりできると思ってた喜んだのに。

そう思っていると、

「フフ。おもしろいわ、この子」

「そうですか？」

うーん。面白いかな？

まあ、これもお兄ちゃんの魅力の一つだけだね。

「あらあら。部長が先ほどおっしゃっておられた通りですわね。『おバカな弟としっかり者の妹ができたかも』だなんて。」

そういう風にリアス部長の目には映ってたのかあ。

まあ、否定はしないけど。

「いや、否定しろよ！」

「うわっ！いきなり私の思考を読まないでよ！お兄ちゃんとはいえ
プライバシーの侵害だよ！」

「う・・・すまん・・・。」

「よし許す！」

あゝ楽し♪

「というわけで、イツセー、マリ。私の下僕というわけでいいわね
？大丈夫、実力があるならいずれ頭角を表すわ。そして、爵位をめ
らえるかもしれない」

「「はい、リアス先輩！」」

「違うわ。私のことは『部長』とよぶこと」

「部長ですか？『お姉さま』じゃダメですか？」

「お兄ちゃん・・・はあ。」

「何でため息つくんだよ毬？」

「別に。」

お兄ちゃん。そんなに部長のことが好きなのかな・・・。

「うーん。それも素敵だけれど、私はこの学校を中心に活動してい
るから、やはり部長のほうがつくりくるわ。いちおう、オカルト
研究部だから。その呼び名でみんなも呼んでくれてるいるしね」

「わかりました！では、部長！俺に『悪魔』を教えてください！」

お兄ちゃん・・・。動機が不純すぎ。

「フフフ、いい返事ね。いい子よ、イツセー。いいわ、私がおなた
を男にしてあげるわ」

といってお兄ちゃんのおごをなでるリアス部長。

「部長！お兄ちゃんの貞操は妹の私を通してからにしてください！」
さすがにそこは譲れない！譲っちゃいけない！！

そう叫んでリアス部長と、お兄ちゃんを離れた。

お兄ちゃんは、

「ハーレム王に俺はなるっ！」
と叫んだ。

「はぁ・・・。」

これからは苦勞が多そう・・・。

イツセイ side・・・

その後、部長から悪魔の基本的な事を教わった。
まず、集まりは旧校舎のオカルト研究部の部室。時刻は深夜。
なんで夜中かというところの方が悪魔の力が発揮されるからだそう
だ。

悪魔だから闇の世界になると力が増すらしい。

だから、夜になると色々が強くなった感覚があったのか。

あと、朝がさらに弱くなった理由も悪魔になったからだそうだ。

悪魔は光を嫌う。光が強いと体に悪いらしい。

俺と毬が朝が弱くなった理由も悪魔に転生したてだから日の光に慣
れていなかったかららしい。

ついで、俺も毬も悪魔になって日が浅いから、まず悪魔社会の仕組
みについて勉強しないとイケないらしい。

あ、あとは学園についてだ。

俺の通ってる駒王学園は部長の領土になってるらしい。

学園の偉い人たちも悪魔関係者でグレモリー家に頭があがらない。

つまり学園は部長の私物みたいな感じだ。

そのおかげで夜中に学園に集まれるんだな。

そして話はチラシ配りになるんだが、魔法陣がかかれたチラシを謎
の機械で点滅してるお宅に届ける。

この謎の機械なんだが、悪魔の科学が生んだ秘密道具らしい。毬が
某ネコ型ロボットののように音を口ずさんでいた。

携帯ゲーム機似でそれプラスチックパネル式だ。

なんか、悪魔ごとに人間界で活動できる範囲は決まってるらしくて、

その範囲内でしか仕事。

つまり、人間との契約で相手の願いを叶えることだ。

代償としてお金や物、最悪命をもらうらしい。命をもらうの部分で毬は震えていた。

毬は怖いもの苦手だからな。

で、この謎の機械に点滅してるところが欲が強い人間がいる家なんだ。

それから悪魔の活動時間はよるだけらしい。なんでも昼は神やら天使やらの時間なんだというこだ。

チラシは使い捨てらしいから、味をしめた人間が悪魔に願いを叶えなくなったらまたポストに入れに行かないといけない。

だから今、俺と毬は自電車で走り回っている。

つらいが、これもハーレムのため！

「うおおおおおおおおお！！！！」

ある日の放課後

「失礼します」

俺たちはいつも通り、部室へ入って行った。

「来たわね」

部長が俺たちを見たたん、朱乃さんに指示をしていた。何だろうか？

「はい、部長。じゃあまずはイッセーくん、魔法陣の中央へきてください」

「え？あ、はい。」

俺は、恐る恐る魔法陣の中に進む。

「イッセー、マリ。あなた達のチラシ配りはもう終わり。よくがんばったわね」

笑顔でいつてくる部長。おお！やっと終わったのか！毬もうれしそ

うにしている。

「改めて、あなた達にも悪魔としての仕事を本格的に始動してもらうわ。」

「おおっ！俺達も契約取りですか！」

「ええ、そうよ。もちろん、初めてだから、レベルの低い契約内容からだけれど。小猫に予約契約が二件入ってしまったの。丁度いいからマリとイッサーにいつてもらうわ。」

やった！ついに・・・ついに！俺の願望がかなう時だ！

俺の足元の魔法陣が光り始めた。

「あ、あの・・・」

「黙っていて、イッサー。朱乃は、いまあなたの刻印を魔法陣に読み込ませているところなの」

そうなんですか・・・。何かパソコンみたいだな。

そういえば、部長が眷属悪魔にとってこの魔法陣は家紋のようなものだって言ってたな。

つまり、召喚するもの、契約を結びたいものにとって、これが俺たちを表す記号になる。

魔力とやらの発動もこの魔法陣を絡めたものになるんだと。

木場たちの体にはこの魔法陣が大小各所に書き込まれていて、魔力の発動と一緒に機能するそうだ。

俺や毬はそれよりも先に魔力コントロールから始めないといけないらしい。

「イッサー、手のひらをこちらに出してちょうだい」

部長の指示どおりに俺は左手を部長に向ける。

すると部長が俺の手のひらをなぞる。なぞり終えたら、俺の手が光り出した。

よく見てみると魔法陣のようだ。なるほど、いまのは魔法陣を書いていたのか。

「これは転移用の魔法陣を通して依頼者のもとへ瞬間移動するためのものよ。そして、契約が終わるとこの部屋に戻してくれるわ」

へえー、便利だなあー。これさえあればいろんな所へ行けるわけだ。魔法陣があればの話だけど・・・。

「朱乃、準備いい？」

「はい、部長」

そういつて朱乃さんが魔法陣の中央から離れていく。

「さあイツセー、中央にたつて」

部長にそう促され、俺は中央に立つ。瞬間また強く光り出す魔法陣。

「魔法陣が依頼者に反応しているわ。これからその場所に飛ぶの。」

到着後のマニュアルは大丈夫よね？」

「はい！」

「いい返事ね。じゃあ、行つてきなさい！」

そして俺の体の周りが輝きだした。

マリside・・・

うわ！お兄ちゃんの体が光つてる！

まぶして見えない。私が腕で目を隠していると光が弱まってきた。

私は魔法陣の方向を見てみる。

・・・え？・・・お兄ちゃん何でいるの？

周りを見ると、リアス部長は額に手をあて、困り顔を浮かべ、朱乃先輩は「あらあら」と残念そうな顔をし、木場君はため息をついていた。

「・・・イツセー」

部長が目を点にしているお兄ちゃんを呼ぶ。

「はい」

お兄ちゃんは何が何だか分からないいつて顔をしていた。

「残念だけど、あなた、魔法陣を介して依頼者のもとへジャンプできないみたいなの」

え！そんな、なんで！？

「魔法陣は一定の魔力が必要なやけど・・・。これはそんなに

高い魔力を有するものではないわ。いいえ、むしろ悪魔なら誰でもできるはず。子供でもね。魔法陣ジャンプなんて初歩の初歩だもの」
えーと、その話から考えるとつまり、

「つまり、イツセー、あなたの魔力が子供以下。いえ、低レベルすぎて、魔法陣が反応しないのよ。イツセーの魔力があまりにも低すぎるの」

な、なんだってー！

つまりお兄ちゃんは役立たずということになるよね？

「な、なんじゃそりやあああ！？」

お兄ちゃん……。私はかわいそすぎて泣きたくなった。

だって、あんなに出世したがつてたのに、役立たず認定って・・・

「・・・無様」

ぼそりと無表情で呟く子猫ちゃん。

やめてあげて！かわいそうだから。

すると朱乃先輩が困り顔で部長さんに尋ねる。

「あらあら。困りましたわねえ。どうします、部長」

「イツセー」

「は、はい」

「依頼者がいる以上、待たせるわけにはいかないわ。イツセー！」

「はい！」

「前代未聞だけれど、足で直接現場へ行ってちょうだい」

「あ、足！？」

あ、その手があったか！

「ええ、チラシ配りと同様に移動して、依頼者宅へ赴くのよ。仕方ないわ。魔力がないんだもの。足りないものはほかの部分で補いなさい」

「チャリですか！？チャリでお宅訪問！？そんな悪魔存在するんですか！？」

ビシッ。

無言で子猫ちゃんが指を指す。

「ほら、いきなさい！契約を取るのが悪魔のお仕事！人間を待たせてはダメよ！」

そう言われてお兄ちゃんは出て行った。

えーと・・・。

私は？

「あなたは魔法陣で行ってもらわ。」

「え！お兄ちゃんは！？」

「後から来るから大丈夫よ。じゃあ魔法陣の中央に向かつて。できたら、お兄ちゃんと一緒に行きたかったなあ。」

リアス部長から魔法陣をもらって、

「マリ。がんばってね。」

「はい！」

そう言つて、私は光に包まれた。

ん・・・。

あれ？知らない家だ。やった。

「転送できたー！！！」

「うわっ！」

あ、いけない大声出しちゃった・・・。

「えーと、グレモリーの使いの者です。あともう一人後から来ますが、先に用件だけ聞きたいんですが？」

「え！あ、ああ。えーと確か子猫ちゃんに要望したんだけど？」

「あ、すいません。子猫ちゃんに二つ依頼があつてそれで片方に代わりとして私が派遣されました。」

「あ、そうなの。じゃあ、金持ちに出来る？」

「あ、少し待ってください。えーと、それだと対価が命になってしまふんですが、よろしいですか？」

私は最上級の笑顔でそう言った。

「いやいやよくないよ！じゃあ、ハーレムは？」

「えーと、あ、それでも同じですね。」

私は最上級の（ry

「まじかよ……。じゃ、じゃあさ君の体は？」

「ああ、すいません。そう言うのにはそれ担当の悪魔がいますのでそちらに。ついでに言つとそういうこと言つと、魂ごと滅ぼしますよ？」

私は怒気を含めた笑顔で言つた。

「ひ、ひい」

あら、すごい怯えてる。

（ピンポーン）

「あ、連れがきたみたいです。中に入れさせていただきます。」

イッセー side・・・

やつと着いた……。

さて中に入るか。

（ピンポーン）

「すいませ〜ん。リアス・グレモ「お兄ちゃん御苦労さま。さ、早く早く！」ま、毬！何でいるんだ！？」

「ん？先に転送してきてたんだ。」

なん……だと……。

「妹に負けた……。」

そのあと色々とおつたが割愛させていただこう。

後曰〜

「はあ。」

「お兄ちゃん。過ぎたるは及ばざるがごとしだよー！」
親指を立てて笑顔で言ってきた。

「だってよく契約取れなかったんだぜ。部長には迷惑かけちゃった

し。。。」

「で、でもさ、一応ほめてくれたじゃん。それで良しとしようよね。」

「そうだな。次がんばるか。」

「うんうん。その意気だよ。」

「心配させて悪かったな。」

そう言っつて、俺は毬の頭をなでてやった。

「うにゅ〜。」

毬は目を細めて喜んでる。

（猫みたいだな）

そうやってなでていると、

「ん？あの子。。。」

毬が何か言っているので見ると、

（ここで、劇的ビフォーアフターのテーマ曲を脳内再生してください）

何ということでしょう。そこには、金髪の超美少女がいるではありませんか。

シスター服を着て、少し子供っぽさを残した顔。

そんな子が困っていたらどうします？やることは一つ！

俺は女の子の近くに行き膝をついて、

「何かお困りですか？」

あくまで、紳士的に聞いてみた。

「え、あの〜。近頃こちらに来て、目的地に行こうとしたんですが、そしたら道に迷ってしまっで。。。。」

毬が女の子の持つっている髪を見て、

「何だ近くじゃない。ねえ、お兄ちゃん。案内してあげない？」

そう言っただので、

「そうだな」

と、俺は同意した。女の子は、

「い、いえっ！そんなご迷惑をかけられません。」

と遠慮してきた。

「いいのいいの。旅は道ずれ世は情けってね。ね、お兄ちゃん。」

「ああ、そうだぞ。遠慮なくていい。」

そう言うど、

「ありがとうございます。あ、私アーシア・アルジェントと言います。」

「あ、俺、兵藤 一誠。んでこいつは「妹の毬です。」よろしくな。」

「はい。よろしくお願いします。」

そう言つて俺たちは歩きだした。

しばらくすると、少年が泣いていた。

どうやら、膝をすりむいたらしい。

アーシアは、近づくと、

「大丈夫ですよ。」

と言いながら傷に手をかざした。

すると、淡い緑色の光が発生した。

あれは・・・、

「神器だよな。お兄ちゃん。」

「ああ。」

どうやら毬も同じことを思っていたらしい。

少年は親に連れていかれた。

そのあと、アーシアの過去について聞いた。

・・・なんだよそれ・・・

「酷いねそれ・・・。」

毬とは考えがよく合う。

やはり、兄妹だからか？

そう思っていると、教会に近づいてきた。

「うつ・・・。」

なんか、すごい悪寒を感じた。

毬は、怖いのかブルブル震えている。

「大丈夫か毬？（小声で）」

「うん・・・。」

そうとは気付かず、アーシアは、

「ありがとうございます。イツセーさん達に会えたのも、髪のお導きのおかげでしょう！おお！神よ！」

ぐわっ！アーシアがお祈りしたため、激痛が走る！
いつてー！！！！

毬も頭を抱えている。ここは兄である俺が何とかしなければ！

「アーシア。大丈夫だから早く行きなよ。（俺たちのために！）」

「え？あ、はい！本当にありがとうございます！」

そう言つてアーシアは教会へと、走って行った。

俺らは急いでそこから離れた。

あー。死ぬかと思つた・・・。

5・悪魔とシスター（後書き）

毬「怖かったよーお兄ちゃん。」

ー「ハイハイ。怖かったな。」

君「さて次はいよいよ、バトル！」

毬「え？そうなの？」

ー「聞いてねえよ！」

君「毬の駒もわかります。次回『闇に潜みし影は・・・』お楽しみに！」

毬「気になる・・・。」

ー「同感。」

6・闇に潜みし影は・・・（前書き）

かなり遅れました。

アドバイスをもらい出来る限り読みやすいように調節させてもらいます。

問題があったら言うてください。誤字が多いかもしれません・・・。

6・闇に潜みし影は・・・

Mariside・・・

「二度と教会に近づいちゃダメよ」

私やお兄ちゃんが本格的に悪魔稼業を開始して数日がたったある日の夜。とてつもなくご立腹な様子のリアス部長がお兄ちゃんに言い放つ。

「教会は私たち悪魔にとって敵地。踏み込めばそれだけで神側と悪魔側の間で問題になるわ。」

今回はあちらもシスターを送ってあげたあなたの厚意を素直に受け止めてくれたみたいだけど、天使たちはいつも監視しているわ。いつ、光の槍がとんでくるかわからなかったのよ？」

え！？そうだったの？そう思うと・・・ブルツ・・・

五体満足でよかった（汗）

お兄ちゃんもそう思っているのか、足が少し震えているし・・・。にしても、リアス部長の怒り方が半端ない。

そんなに危険だったんだ・・・。

「教会の関係者にも関わってはダメよ。特に『悪魔払い』は我々の仇敵。」

神の祝福をうけた彼らの力は私たちを滅ぼせるほどよ。神器所有者が悪魔払いなら尚更。

もう、それは死と隣り合わせのと同義だわ。イッセー」

「は、はい」

すごい眼力・・・

「人間としての死は悪魔への転生で免れるかもしれない。けれど、悪魔払いを受けた悪魔は完全に消滅する。無に帰すの。」

——無。何もなく、何も感じず、何も出来ない。それがどれだけのことかあなたはわかる？」

無って、想像できないな。

想像できたら無いじゃないし（笑）

「ゴメンなさい。熱くなりすぎたわね。とにかく、今後は二人とも気をつけてちょうだい。」

「は、はい！」

「了解です！」

もう出来たら二度と近づきたくないな。

もちろん、お兄ちゃんが教会に何かされたら、絶対ぶっ潰して消滅させてやるけどね♪

「あらあら。お説教はすみましたか？」

「おわっ」

「キャッ」

いつの間にか朱乃先輩が後ろにいた。びっくりした・・・。

「朱乃、どうかしたの？」

というリアス部長の問いかけに少し顔を曇らながら朱乃先輩が言う。

「討伐の依頼が大公から届きました」

——はぐれ悪魔。

そういった存在があるらしい。

爵位持ちの悪魔に下僕にしてもらった者が、主を裏切り、または主を殺して主なしとなる事件が極稀にあるらしい。

それで、そういった野良犬？による被害を最小限に抑えるために、見つけだして、主人、もしくは他の悪魔が消滅させるのがルールだということらしい。

これは、天使や墮天使側でも言われてることらしくてはぐれ悪魔がいたらみつけしだい殺すということらしい。

お兄ちゃんはそのいう物に間違えられて殺されかけたらしい。
うん。ハタ迷惑極まりないね。この世から消し去ってやらなくちゃ

というわけで、私たちオカルト研究部一同。

町外れの廃屋近くにきてまーす！！テンション高いって？

だって、怖いからテンション上げなくちゃ怖くて泣いちゃいそうなの！

なんでも、ここで毎晩はぐれ悪魔が人間をおびき寄せて食ってるらしい。

怖い……………。

『リアス・グレモリーの活動領域内に逃げ込んだため、始末してほしい』

って、いうのが偉い人から届いたものだから、こうしてクエストを受託して目的地へ向かっているんです。

時刻は深夜。辺りには背の高い草木が生い茂っていて、そのさきに廃屋が見える。

見えないのも恐怖だけど、見えても恐怖って……。

「……血の臭いがしますね」

木場君がそう言った。

え！？そんな怖いこと言わないでよ！

「……はい」

隣にいた子猫ちゃんは制服の袖で鼻を覆っている。

「イツセー、マリ。2人にはちょうどいい機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

そのリアス部長の一言に少し驚く。

そんな！こんな怖いところで戦えって……。

無理無理！！絶対無理！！！！

「大丈夫。流石に戦わせないわ。でも、悪魔の戦闘を見ることはできるわよね？」

今日、2人は私たちの戦闘をよく見ておきなさい。そうね、ついでに下僕の特性を説明してあげるわ」

「下僕の特徴？説明？」

怪訝そうな表情を浮かべながらお兄ちゃんがリアス部長を見る。
よくわからない。どういう意味？

「主となる悪魔は、下僕となる存在に特性を授けるの。
・・・そうね、頃合だし、悪魔の歴史を含めてその辺を教えてあげるわ」

そういつて私とお兄ちゃんに現在の悪魔の状況を説明し始めた。

「大昔、我々悪魔と堕天使、そして天使を率いる神は三つ巴の大きな戦争をしたの。

大軍勢を率いて、どの勢力も永久とも思える期間、争い合ったわ。
その結果、どの勢力も酷く疲弊し、勝利する者もないまま、戦争は数百年前に終結したの」

リアス部長の言葉に木場君が続ける。

「悪魔側も大きな打撃を受けてしまった。
二十、三十もの軍団を率いていた爵位を持った大悪魔の方々も部下の大半を長い戦争で失ってしまったんだ。もはや、軍団を保てないほどにね」

次に朱乃先輩が口を開ける。

「純粋な悪魔はそのときに多く亡くなったと聞きます。
しかし、戦争は終わっても、堕天使、神との睨み合いは現在でも続いています。」

いくら、堕天使側も神側も部下の大半を失ったとはいえ、少しでも隙を見せれば危うくなります」

「そこで悪魔は少数精鋭の制度を取ることにしたの。それが『^{イーヴィル・ピース}悪魔の駒』」

リアス部長の話で気になる単語が出る。

「イーヴィル・ピース？何ですかそれ？」

お兄ちゃんも疑問に思ったらしく、首をかしげている。

「爵位を持った悪魔は人間界のボードゲーム『チェス』の特性を下僕悪魔に取り入れたの

。下僕となる悪魔の多くが人間からの転生者だからって皮肉を込めてね。

それ以前から悪魔の世界でもチェスは流行っていたわけだれど。それは置いておくとして。

主となる悪魔が『王』。私たちの間で言うなら私のことね。

そして、そこから『女王』、『騎士』、『戦車』、『僧侶』、『兵士』と五つの特性を作り出したわ。

軍団を持てなくなった代わりに少数の下僕に強大な力を分け与えることにしたのよ。

この制度をできたのはここ数百年のことなのだけれど、これが意外にも爵位持ちの悪魔に好評なのよね」

「好評？チェスのルールで？」

「競うようになったのよ。

『私の騎士は強いわ！』、『いえ、私の戦車のほうが使える！』っ

て。

その結果、チェスのように実際のゲームを、下僕を使って上級悪魔同士で行うようになったのよ。

駒を生きて動く大掛かりなチェスね。私たちは『レーティングゲーム』と呼んでいるけれど。

どちらにしても、このゲームが悪魔の間では大流行。今では大会も行われているくらいだわ。

駒の強さ、ゲームの強さが悪魔の地位、爵位に影響するほどにね。

『駒集め』と称して、優秀な人間を自分の手駒にするのも最近流行っているわ。

優秀な下僕はステータスになるから」

つまり、偉い人の娯楽のために人生狂わされる奴が出てきちゃうってことなんだ。

そんなに自分の栄誉や評価が大切な？

「そのゲームにはもう部長たちは出たりしてるんですか？」

とお兄ちゃんがリアス部長に向けて質問をぶつける。

「私はまだ成熟した悪魔ではないから、公式な大会などには出場できない。

ゲームをするとしても色々な条件をクリアしないとプレイできないわ。

つまり、とうぶんはイッセーやマリ、ここにいる私の下僕がゲームをすることはないってことね」

「じゃあ、木場君たちもそのゲームをしたことはないってこと？」

「うん」

うん。無理。

私はお兄ちゃんにしがみつく。

お兄ちゃん、私は私がこういうのが苦手なのを知ってるから頭をなでてくれた。

（あゝ落ち着く。）

落ち着いたところでさらに細かくみてみると、両手には獲物としての槍が一本ずつ。

下半身は四本足があり、すべて太く、爪も鋭い。尾には蛇が見える。大きさも五メートルは軽くある。

うん、正真正銘の『見た目バケモノ』。何で人の格好しないのかな・・・。

私が戦えないじゃない！！

「主のもとを逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れまわるのは万死に値するわ。」

グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげるわ！」

「こざかしいいい！小娘ごときがああ！その紅の髪のように、おまえの身を鮮血で染め上げてやるわああああ！」

死亡フラグ見事に建てましたね。

「雑魚ほど洒落のきいたセリフを吐くものね。裕斗！」

「はい！」

リアス部長の呼びかけで木場君が飛び出す。
うわー、速いなあ。

「イツセー、マリ。さっきの話を続けるわ」

話？

特性がどうってやつ？

「裕斗の役割は『騎士』、特性はスピード。『騎士』となったものは速度が増すの」

リアス部長の言うとおり、木場君の動きは徐々に速くなる。すぐく速い。人外の方は……。ただ振り回してるだけだね。あれじゃ、あたるものも、あたらないよね。

「そして、裕斗の最大の武器は剣」

そして、足を止めた木場君の手には鞘に収まった西洋剣が握られていた。

あれ？ 剣なんて持ってた？

木場君はそのまま剣を鞘から抜く。そして、再び走り出す。そして敵が認識するよりも速く、両腕を切り落とした。

「ギヤアアアアアアアアアッ！！」

人外の悲鳴が木霊し、両腕から鮮血が飛び散る。

「これが裕斗の力。目では捉えきれない速力と、達人級の剣さばき。ふたつが合わさることで、あの子は最速のナイトとなれるのよ」

確かに、すごいと思う。

悲鳴を上げる人外の足下にはいつの間にか、子猫ちゃんが立っている。

「次は小猫。あの子は『戦車』。戦車の特性は――」

「小虫めええええつつ!!」

その言葉と同時に、人外はチビスケを踏み潰しにかかる。

「危ないっ!!」

私はつぶされると思っ て目を手で覆った。

でも、つぶれる音がしない。

恐る恐る見てみると、人外の足は地面につくことはなく、子猫ちゃんに全衝撃を受け止められた。

え? うそ! ? 子猫ちゃんが受け止めてる!

「『戦車』の特性はシンプル。バカげた力。屈強なまでの防御力。無駄よ。あんな悪魔の踏みつけたぐらいでは小猫は沈まない。潰せないわ」

だからあんなにすごいんだ!

グンッ!!

完全に人外の足を持ち上げてどかす子猫ちゃん。

「……ふっ 飛べ」

子猫ちゃんは空高くジャンプし、人外の腹に拳を撃ち込む。拳の威力に人外の体が後方に吹き飛ぶ。

すごいパンチ……。

お兄ちゃんは子猫ちゃんのパンチヲを拝もうと凝視している。
はぁ……。お兄ちゃんは……。

私はお兄ちゃんの足を踏んでやった。……こっちに顔を向けるく
らいの強さで。

「最後に朱乃ね」

「はい、部長。あらあら、どうしようかしら」

朱乃先輩が笑みを浮かべながら、さっきの一撃で倒れこんでいる人
外のもとへ歩みだす。

「朱乃は『女王』。私の次に強い最強の者。

『兵士』、『騎手』、『僧侶』、『戦車』、すべての力を兼ね備え
た無敵の副部長よ」

「ぐううう……。…」

近づいてきた朱乃先輩を睨みつける人外。それをみてまた笑みを浮
かべる。

「あらあら。まだ元気みたいですネ？それなら、これはどうでしょ
うか？」

そういつて朱乃先輩が天に向かって手をかざす。すると――

カッ！

文字通り、天からの一撃。人外に雷が落ちた。

「ガガガッガガガッガガッ！」

それを受けて苦悩な声をだす人外。
びっくりした。

「あらあら。まだ元気そうね？まだまたいけそうですわね」

カッ！

再び雷がうち下ろされる。

あ、あの～。そろそろいいのでは・・・？

「ギヤアアアアッ！」

それを受け、また声をあげる人外。
これで終わったかと思ったら、三発目が落下する。

「グアアアアアアッ！」

え、もう許してあげようよ・・・。

「朱乃は魔力を使った攻撃が得意なの。
雷や氷、炎などの自然現象を魔力で起こす力ね。そして何よりも彼女
は究極のSよ」

・・・少し怖さが強まった。・・・別の意味で。

「普段、あんなにやさしいけれど、一旦戦闘となれば相手が敗北を
認めても自分の興奮が収まるまで決して手を止めないわ」

・・・怖い・・・。

私はお兄ちゃんにくつついて震えていた。

「・・・うう、朱乃さん。俺、怖いっス」

お兄ちゃんも怖いらしい・・・。

「怯える必要はないわ、イツセー、マリ。朱乃は味方にはとてもやさしい人だから、問題ないわ。

あなた達のこととてもかわいいと言っていたわ。今度甘えておあげなさい。

きつとやさしく抱きしめてくれるわよ」

「うふふふふふ。どこまで私の雷に耐えられるかしらね？

ねえ、バケモノさん。まだ死んではダメよ？トドメは私の主なのですから。オホホホホッ！」

それから数分間、朱乃先輩のSMショーが続いた。

朱乃先輩が一息ついたのを確認したらリアス部長が完全に戦意がなくなつた人外のもとへ歩き出す。

そして、地面に突つ伏す人外に向かって、リアス部長は手をかざす。

「最後に言い残すことはあるかしら？」

慈悲深い・・・。

「殺せ」

人外の小さく声を発する。

「そう、なら消し飛びなさい」

すると、リアス部長の低い、冷たい声音とともにどす黒い魔力の塊が手のひらから撃ち出される。

塊は人外の全身を包み込み。そして、魔力が宙に消えたとき、人外の姿も完全に無かった。

文字通り、塵も残らなかった。

「終わりね。みんな、ご苦労さま」

少し人外に同情した。だって、レクチャーのためだけにあれだけなぶられたのだから・・・。

しかし、これが悪魔の戦い……。少し怖いけどその分やる気がわいてきた！

でも、なんか忘れてる気がする……。あ、そうだ。

「リアス部長、聞きそびれたんですけど」

「何かしら？」

「私やお兄ちゃんの駒・・・、下僕としての役割はなんなんですか？」

「あ、そうだったそうだった。部長、どうなんですか？」

思い出したようにお兄ちゃんも聞いてくる。

リアス部長ははっきりと言った。

「マリ、イツセー。あなた達は『兵士』よ」

私たちは、どうやら一番下らしい。

とりあえず頑張らなくちゃね！

6・闇に潜みし影は・・・（後書き）

毬「お兄ちゃん！同じ駒だし、頑張ろうね。」

一「おう！そうだな！」

君「喜んでもらえて何より。さて次回『はぐれは何を見て笑う』」
毬＆一「おたのしみに！」

7・はぐれは何を見て笑う（前書き）

いや〜フリードが描きにくい！

かなり疲れました。

感想お願いします。

7. はぐれは何を見て笑う

イツセイ side・・・

はぐれ悪魔から一夜明け、自分の駒が『兵士^{ボーン}』だと分かり、落胆がデカかった。

上級悪魔になるには道が遠いな・・・。
でも、あきらめない！あきらめないぞ！！

「よっしゃー！ やってやるぜー！！！」

夜中遅くに叫んで、気合を入れた俺は呼んでくれた人の場所へ走る。呼ばれた場所は、一軒家だった。

ブザーを鳴らす前に鍵が開いてることに気がついた俺は中に入った。そして、俺は感じた。

「（なんだ、これ？ 凄い嫌な感じだ・・・）」

特別、殺気がわかるというわけでも無いのに・・・。

ゆっくりと進んでいく俺は家の中を見てみると、そこは普通と変わらない、一軒家だった。

そのまま、依頼人を探していると、

「な、なんだよ・・・、これ・・・」

そこには男が、太い釘のようなもので手足を壁に打ちつけられ、腹を切り裂かれ内臓を放出していた。

「う！・・・おええええ！」

酷い、酷過ぎる！どうやったら、ここまでこんなことが出来る？
そのように考えていたその瞬間。

後ろから寒気のような例えようのない衝動に駆られ、俺はその場から
急いで離れた

「うおっ！？」

ついさっき俺の体があった場所に何かが通り過ぎる。

「あらら？ 避けれちった？」

声がした方向に振り向くとよくわからない恰好をした男がいた。

「誰だ、お前？」

俺はとりあえず自分の持っている疑問をぶつけた。男は呆れたように

「この格好見りゃ、分かるでしょ？ バーカ！」

と言い放った。

・・・まあ、予想通りの答えだけど。俺は自分の持っている答えを
言った。

「・・・神父だろ？」

「そういうお前は悪魔だよな？ 取り敢えず、悪魔は俺の悦楽の
為に死んでくれよ！ ギャハハハハ！！」

っ！！まじかよ！クソッ！！

ダッ！！

俺は部長の言いつけを守ることにし、とっさに逃げ出した。

『神父、もしくは堕天使を見たら、逃げなさい』

部長の言うとおりだった。

コイツはヤバイ。なんとも言えぬ恐怖感が体中を駆け巡った。玄関の方は神父がいるから通れない。だったら・・・窓から！そう思つて窓へ向かおうとすると太ももあたりに激痛が走った。

「ぐあああ！！」

撃たれた？撃たれたのか！？

銃声音はしなかったのに。

「撃たれたって分からなかったみたいだねえ？

そりゃあ、そーだろ。銃声音はしねえからなあ。それよりも気分はどうだ？

この武器、光の弾丸を放つエクソシスト特製の被魔弾はチヨー気持ちイイだろお？」

くそっ！ヤバイどうすれば・・・。そう考えている間にも神父は銃を俺の方に構える。

「ヒヤハハハハハハハハ！！悪魔は存在する意味なくし。さつさとくたばりやがれ糞野郎！ヒャーハアアアアアア！」

撃たれる！そう思つた瞬間、

「・・・やめてください!」

そこに一人の女性が割り込んだ。

「・・・アーシア?」

割り込んだ人物はアーシアだった。

「・・・イツセーさん?」

向こうは誰とも気付かずにかばってくれたらしい。

嬉しい限りだが危ないよ・・・。

神父はそれを見て、

「なに? なに? キミたち知り合い?

ちよーウケル! 悪魔とシスターは受け入れることのできない存在
なんだよ!!

悪魔とシスターの禁じられた恋? すごいねえ。ふざけてんじゃねえ
よ!」

言い終わると同時にアーシアを剣の柄で殴り倒した。

「アーシア!」

神父が俺に止めを刺そうとしたとき、地面に青白い紋章が光った。
中から出てきたのは木場、小猫ちゃん、朱乃さん、部長そして毬だ
った。

Mariside・・・

ふう〜。お兄ちゃんとは別々に仕事をしてたけど・・・。
いや〜、疲れた疲れた♪

お兄ちゃんも帰ってきてるだろうな。

私はスキップしながら部室へと向かった。中へ入ると、

「まずいわね・・・。」

という、リアス部長の声が聞こえた。その声に余裕を感じられなかった。

部屋の中を見ると、お兄ちゃん以外の皆がいた。

何かピリピリしてるけど・・・どうかしたのかな？

・・・はっ！？まさかお兄ちゃんに何かあったのでは！？

私はいてもたってもいられず、リアス部長に訪ねた。

「リアス部長！何かあったんですか！？」

「マリ。ええ、少し不味いことになったのよ・・・。

朱乃、とりあえずあっちにいくわよ。魔法陣の準備を」

「はい、部長。小猫ちゃん、手伝ってくれるかしら？」

「・・・はい」

部長の指示で、なにやら準備を始める朱乃先輩と子猫ちゃん。
っ！やっぱり何かあったんだ！

「リアス部長！説明をもらえますか？」

「イツセーが襲われてるの」

「ええ!？」

やっぱり……。でも誰に？

「『悪魔払い』にだよ。」

と、いつの間にやら剣を携えた木場君が立っていた。いつの間に……。

「『悪魔払い』って、確か……」

「神や堕天使によって強力な力を与えられ、悪魔を滅ぼす存在、だよ」

私が思い出すのより先に木場君が答えた。

「ああ、そうだったそうだった。ありがとう木場君。」

だとすると……

「お兄ちゃんが危ないじゃない!!!!」

「だから焦ってるのよ」

リアス部長が嘆息しながらいう。

「でも何でわかったんですか？」

「前回、前々回と。契約は破談になるけれど何故か依頼者の評価が

抜群だったから、

どうしてかしらと思って使い魔を使って確認してたの、そしたら――

「『悪魔払い』が依頼者の家に待ち受けていたんだ」

リアス部長と木場君の懇切丁寧な説明で、お兄ちゃんのことを監視していたということが分かった。

酷い！お兄ちゃんを盗撮していいのは私だけなのに！

「しかしマズいわね。イツセー、大丈夫かしら・・・」

あ、危ない危ない。お兄ちゃんに危機が迫ってるというのに・・・。
心配そうな顔をしているリアス部長。木場君も同様に、少し顔を強
ばらせる。

早くしないと！

「部長、準備が整いましたわ」

私とリアス部長、木場君が話をしている間に準備が終わったらしい。
教室の床にはかなりの大きさの魔法陣。

「ありがとう、朱乃。」

・・・みんな、あつちには『悪魔払い』がいるわ、戦闘になること
は覚悟して。油断しないように！」

「・・・はい！」「・・・」

私を含めた皆が返事をする。

と、今度は部長が私の方を向く。

「マリ、あなたは・・・」

「『残りなさい』という気ですか……。答えを先に言わせてもらいます。絶対いやです。」

私は睨みながら答える。しばしの沈黙が私とリアス部長の間に流れる。

すると、先に口を開いたのはリアス部長だった。

「・・・わかったわ。ただし、足手まといには――」

「なる気はありません!!」

お兄ちゃんを傷つけた奴は片っ端から……。ふふふ。

「――いくわよッ!!」

「『はいッ!!』『』『』」

リアス部長のかけ声とともに、全員が魔法陣の上に乗った。

転送が終わると目の前にはおかしな人間と足を抑えたお兄ちゃん、倒れているアーシアちゃんがいた。男は、

「悪魔の団体さんかよ、ヒヤハ!」

と言いながら剣を朱乃先輩に振り降ろす。その瞬間、木場君の剣とぶつかった。

ガキイン！

「おっと、そうはいかないよ」

「うぜっえなあ！」

木場君と男が打ち合っているとき、後ろからリアス部長がやって来た。

「・・・ごめんなさいね、イツセー。」

まさか『はぐれ悪魔払エクソシスト』が居たなんて・・・その傷どうしたの？」

「あ、これ、撃たれちゃって・・・」

・・・はい？撃たれた？あの神父に？ウタレタオニイチャングウタレタ・・・。

「・・・。クロス・・・。」

私の声がこの空間に酷く寂しく響いた。

リアスside・・・

「・・・。クロス・・・。」

私の横でマリがつぶやいた。

その瞬間、気が付いたらマリは、はぐれ悪魔払いの懐へもぐりこんでいた。

速い！私はそうとしか感じられなかった。

「クタバレ！」

「ああ？ぐあああああ！」

マリが殴った瞬間、はぐれは家の床をぶちぬいて地面にめり込んでいた。

おかしい。あれだけの動きにあれだけのパワー、明らかに『ポーン』ができる動きじゃあない。

プロモーションもできるはずないし・・・。

そう考えていたとき私はおかしい魔力に気付いた。

禍々しい魔力。なぜ気づかなかったのか不思議に思うくらいの量だった。

「なに・・・これ・・・」

「すごい魔力ですね。」

「あらあら・・・。」

皆も感じたらしく、全員冷や汗をかいていた。

私もすごい量の汗をかいているのでしょね・・・。

そして気付いた。その魔力が―マリから湧いて出てきている《・・・・・・・・》ことに。

おかしい。あの子の魔力は普通位のはずなのに・・・。

「不味い！毬が完全にキレた！！早く止めないと！」

「っ！？イッセーどういうこと！？」

「毬があそこまでキレると、相手が壊れるまで暴れます！しかも周りを気にせずに！」

そこまで危険なの！？
マリの方を見ると、

「フザケルナ……。フザケルナ……。」

ドカツ！バキッ！グシャッ！

「ぐえっ！……。おこっ……。。」

はぐれがすごいことに……。

「い、イッセー。あの子を止められるかしら？」

「はい……。じゃあ、毬に向かって投げてくれない？子猫ちゃん？」

「わかりました……。。」

子猫はイッセーを担ぐとマリに向かって放り投げた。

「毬いいい！！」

どんっ！ごろごろ。ドカンッ！

イッセーはマリに抱きつくとそのまま転がり壁に思いっきりぶつかった。

「お兄ちゃん……。？え？ふえ！？」

マリは赤くなるとそのままキュ〜という音が鳴りそうな感じで気絶

した。

……。私たちは何も言えなかった。

「!? 部長、近くから堕天使が数名近づいています! このままではこちらが不利です!」

「えっ!? イッセー! 撤退よ!」

「はい! そうだっ! 部長、あの子も!」

「無理よ! この魔方陣は悪魔しか飛ばせない。」

「でも!」

「諦めなさい! イッセー。子猫!」

子猫にマリとイッセーを抱えさせ魔法陣を起動させた。

7・はぐれは何を見て笑う（後書き）

毬「うにゅ」

—「治らない……。」

君「そうだね……。ま、まあとりあえず次回『シスター、悪魔と遊ぶ』」

—「お楽しみに！」

毬「ふにゅ」

8・シスター、悪魔と遊ぶ（前書き）

昨日はアップ出来ずに申し訳ございませんでした。

さて今回はすごいことが起こります。

毬の神器。いろんな候補があって悩んでいます。
なのでアンケートを取りたいと思います。

締め切りは明日の朝7時まで
候補は

- 1・他のアニメの能力のパクリ
 - 2・完全オリジナル
 - 3・両方
- の三つです。

どれにしてもチートっぽくなります。

初めてなので間違っていたら指摘をお願いします。

8・シスター、悪魔と遊ぶ

イツセーside・・・

「はぁ・・・。」

俺はベンチに座ってため息をついていた。
何故かって？

だってアーシアを助けられず、足も完全に治らずと色々とあり過ぎてシヨックがでかいんだよ。
そうやって落ち込んでいると、

「イツセーさん・・・？」

と俺の名前を呼ぶ声がした。

誰かと思って顔をあげてみると、そこにはアーシアがいた。

「アーシア・・・？」

え！？何で！？

俺は驚きのあまり勢いよく立ちあがってしまい、足に激痛が走った。

「イツセーさんどうしてここに？」

どうやら俺が痛みに顔をゆがめたことに気づかなかっただけらしい。

まあ、余計な心配をかけずに済んだからよかったけど・・・。なかなかぁ・・・。

「アーシアこそどうしてここ」『く〜』・・・。アーシアもしかして

お腹すいてる？」

アーシアは顔を真っ赤にしてうつむいていた。
かわいいなあ。アーシア『ぐ』……。
安心したら腹が減っていたことに気付いた。

「とりあえず昼飯にしようか。」

「はい！」

アーシアが満面の笑みで返事してきた。
本当にかわいいなあ。

とりあえず、俺らは昼飯を食う場所を探しに歩き出した。

くその頃、毬はく

「きゅ……。く」

昨晚、一誠に抱きしめられたことによって自分の部屋のベッドの上
で絶賛気絶中だった。

俺とアーシアは、とりあえずすぐ近くにあったハンバーガーショッ
プによった。

アーシアはこういう物は初めてらしく食べるのに手こずっていた。
いや〜かわいいよ。何度目だろ？

「アーシア。これはこうやって、こうやってかぶりつくんだ。」

俺はアーシアに食べ方を教えた。アーシアはそれを真似して、ハン

バーガーにかぶりついた。

「んむっ！すごい美味しいです！」

うん、良かった。でもさお祈りするのだけはやめて……。
本気で死ねるから……。

そのあとはゲーセンで遊んだ。

とても楽しかったよ。俺の財布の中から福沢さんが何人消えた
う……。

でも、アーシアがとても楽しそうにしていたのでよかった。

最後にアーシアと公園にようだった。

「本当に今日は楽しかったです！イッセーさんにかわいいぬいぐる
みも取ってもらって……。

今日は本当にありがとうございました。」

「それはよかった」

そう言った瞬間、足元の石につまずいてしまった。

「ととと。っ！いたた……。」

「イッセーさん。やっぱり昨日の怪我が痛みますか？」

アーシアが心配そうに聞いてきた。
気が付いていたのか……。

「う、うん。少しだけね……。」

そう言うとアーシアは、

「その傷見せてもらえませんか？」

「え？あ、ああ」

俺は言われたとおりにズボンの裾をまくり上げた。

アーシアは俺の足元にかがむと傷口に手をかざした。

すると、アーシアの手元から淡い緑色の光が発生した。

そして、傷がみるみると治っていき、完全に治ったのを見ると、アーシアは手を離れた。

「これでどうでしょうか？」

「おつ。おおつ！すげえよ、アーシア！違和感がなくなったよ！痛みも全然ないぞ！」

本当に何もなかったように傷が消えていた。

「ねえ、アーシア。これって、神器だよね？」

「はい。そうですけど、どうして知ってるんですか？」

「実は俺も神器持ってるんだ。いまのところは大して役に立ってないけど。」

「イツセーさんも神器持っているんですか！？全然、気付きませんでした。」

アーシアはとても驚いた顔で俺の顔を見てくる。

「でもアーシアの神器すごいな。」

そう言うとアーシアは突然目をうるうるさせるといきなり泣き出した。

え！？何！？俺なんかした！？？

俺があたふたとあわてているとアーシアは落ち着いてきたようで、泣くのが止まっていた。

アーシアの目は赤く腫れていた。

「すみません。お見苦しいところを……。」

アーシアはそう言ってきた。俺はなぜ泣いていたのか、気になり、

「アーシア。どうしていきなり泣いたんだ？」

と聞いてしまった。

「あ、すみません。実は最初に会った時の話なんですけど……。」

そうだった。確かにそういう話を聞いたんだ。

「ごめん……。また嫌なこと思い出させて……。」

「別に大丈夫です。あのときは、概要だけでしたけど今度はちゃんと説明します。」

そしてアーシアは語り始めた。

聖女から魔女へと変わり果てた優しすぎる少女の物語を……。

「——そうして誰にも庇かばってもらえずに生き場を失った私は、イッセーさん達が知っている『はぐれ悪魔被エクスシスト』の組織に拾われました」

「・・・」

俺は何も言えなくなった。

概要は聞いていたけど、こんなにひどいものとは思ってもみなかった。

「おかしいだろ・・・。」

俺のつぶやきは誰にも聞こえず空気中に溶けて行った。

「これも試練なんです。」

私が全然ダメなシスターなので、こうやって修行を与えてくれるんです。今は我慢の時なんです」

また笑いながらアーシアは口を開く。

まるで自分に言い聞かせるかのように。

「お友達もいつかはたくさんできると思ってますよ。」

私、夢があるんです。お友達と一緒にお花を買ったり、本を買ったりして…、おしゃべりして…」

堪え切れなくなったのか、アーシアの口は笑う事が出来ずに歪む。そしてぼろぼろと涙が頬を流れて行く。

我慢していた感情が一気に溢れだしたのだろう。

俺はアーシアの手を握って、声高らかに宣言してやった

「アーシア、俺が友達になってやる。いや、もう俺はアーシアの友達だ！」

この言葉に、アーシアはきよんとする。

「あ、悪魔だけど大丈夫。アーシアの命なんて取らないし、代価もいらない！
気軽に遊びたい時に俺を呼べばいい！」

「…どうしてですか？」

「どうしてもこうしてもあるもんか！
今日1日俺とアーシアは遊んだだろう？話しただろう？笑いあっただろう？」

なら、俺達はもう友達だ！悪魔だとか人間だとか、神様だとか関係ない！俺達は、友達だ！！」

アーシアが泣きそうな顔になってくる。

「…それは悪魔の契約としてですか？」

「違うさ！俺達は本当の友達になるんだ！訳の分からない事は抜き！
そういう事は無しだ！話したい時に話して、遊びたい時に遊んで、
そつだ、買い物も今度付き合っよう！

本だろうが花だろうが何度でも買いに行こう！ な？」

今この場で俺がアーシアにしてやれる事は少ない。

過去は変えることはできない。だったら今を過去を忘れるくらい楽

しいものにしてやればいい！

アーシアは今まで耐えていた涙をぼろぼろとこぼしていた。

「…イツセーさん。私、世間知らずです」

「これから俺と一緒に町へ繰り出せばいい！」

「…日本語だって、まだうまくしゃべれませんし、文化も分かりませんよ？」

「俺が教えてやるよ！ことわざまで話せるようにしてやらあ！

俺に任せろ！なんなら日本の文化遺産でも見て回ろうぜ！サムライ！スシ、ゲイシャだぞ！」

「…友達と何をしゃべっていいかも分かりません」

「今日1日、普通に話せたじゃないか。それでいいんだよ。俺はもう友達として話していたんだ。

どうせなら毬とはなせばいい。毬も同じくらいの年齢だから普通に話せるはずさ。

恋の話・おしゃれの話。何でも話せ！あいつも嫌がったりは絶対にしない！」

「…私と友達になってくれるんですか？」

「ああ、これからもよろしくな、アーシア」

アーシアにそう言つとアーシアは涙を止めることができずに思いっきり泣き始めた。

涙の意味が違うことくらい簡単にわかる。

「アジア。これからはずっと、ずっと友達だ。」

俺がそう言った瞬間、

「無理よ。」

第三者からの冷たい言葉が放たれた。

俺は声のした方に振り向いた。

そこにいたのは、

「ゆ、夕麻ちゃん・・・？」

俺を殺した夕麻ちゃんだった。

M a r i s i d e . . .

「うにゆ？・・・ふわ。」

あれなんで寝てたんだろ？

確か・・・色々あってあのくそつたれのカス野郎をぶっ飛ばしてて、その途中でお兄ちゃんが・・・。

そこまで思い出して私は顔を真っ赤にして悶え始めた。

キヤー！お兄ちゃんがお兄ちゃんが・・・。

私は数分間身悶えると、お兄ちゃんの部屋え向かった。

「お兄ちゃん。って、あれ？」

お兄ちゃんの部屋のドアを開け、中に入ってみると誰もいなかった。とりあえず、GPSでお兄ちゃんがどこにいるか調べてお兄ちゃん

88

いた。

「あは、あははははは！これで動けないわよねえ。ずいぶんと好き勝手やってくれたじゃないの。」

すぐには殺さないわ、じっくりいたぶってあげる。あははは！」

このくそ女！！！！

しかし、お兄ちゃんを人質にとられた以上私は動こうにも動けなかった。

ザシュッ

「ガア！」

女が放った光の槍が私の足の突き刺さった。
痛い……。しかも体中に激痛が走りつづけている。

「あはははは！私のこの槍はね、大きさはそこまでなくても光量がすごく多いの。すごい痛むでしょう？
でももつと痛がってもらわないとねえ！」

そう言って女は複数の小さな光の槍を私に向けて放つ。

ザシュザシュザシュザシュ……。

永遠と放たれているのか分からないくらいに私の体に光の槍が突き刺さる。

それが止まる気配はない。

「やめろ！頼むからやめてくれ！俺はどうなってもいいから！毬を

「攻撃するのをやめてくれ！」

「お願いします！やめてください！何でもしますから！お願いします！す！」

二人が頼みこんでいる。

女は

「イツセー君少しは自分の状況理解しなさいよ。」

そう言つて女はお兄ちゃんの腹に向けて光の槍を放つた。

ザ
シ
ユ
ツ

「ぐぼっ！」

お兄ちゃんの腹に光の槍が突き刺さる。

この・・・クソアマア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

私の理性が限界に達しようとしようとする。

しかし、お兄ちゃんの命がまだ脅かされているため、動けない。

「それにアーシアあなたに選択権なんて存在し無いのよ！あはははは」

そう言って女は哄笑していた。

その間にも私の体には光の槍が突き刺さる。

さつきから急所ははずされているので激痛が体中をずっと駆け回っている。

「さて、それじゃあそろそろ死になさい。」

女は冷たくほほ笑むと特大の光の槍を放った。

「毬iiiiiiii!!!!!!」

お兄ちゃんの叫びを最後に私の体はこの世から消え去った。

8・シスター、悪魔と遊ぶ（後書き）

君「今回は一人でやらせていただきます。

さてすごい展開になってきました。

ここからの展開ももう頭の中には出ているんですよー。

話替わりましてアンケート。経験不足の筆者のために皆さんご協力お願いします。

さて次回『復讐の名のもとに』

お楽しみに」

9・復讐の名のもとに（前書き）

つつかれた。

今回はイッセーがかなりヤバい状況です。

今日中に1巻終わらせられたらいいなあ。

9・復讐の名のもとに

イツセーside・・・

うそ・・・だろ・・・。

「ま・・・り・・・？」

確かに毬はそこにいた。
いたはずなんだ・・・。

「あははは！どうイツセー君？君のいといい妹さんは死んじゃったわよ？あはははは！」

夕麻ちゃんが笑いかけてくる。

しかし俺はそんなことを気にする余裕はなかった。

毬が・・・死んだ・・・？

俺はそんな現実を受け入れられなかった。

自分のけがも気にならないくらいに・・・。

「あー面白かった。みじめねえ。妹を守れなかった兄なんてねえ。
さてと、アーシア教会に戻るわよ。」

「あ・・・。」

アーシアも先ほどまでいた。

自分の友達となってくれた男の妹が死んだということに、何も言えなくなってしまうていた。

「イ、イツセーさんの怪我だけでも治させてくれませんか？」

「別にいいわよ。そんな屑。

トウフェイス・クリティカル
その屑の神器は龍の手っていう、

力を倍にすることしかできないありふれた神器よ。別に生きていても危機にはならないわ。

殺す意味がなかったわね。あははは。」

俺はただただぼんやりと聞いていた。

トワイライト・ヒーリング
アーシアが聖母の微笑みで俺の傷を癒していく。

癒し終えた後アーシアは夕麻ちゃんに連れて行かれた。

俺が取ってあげたぬいぐるみを落として・・・泣きながら・・・。

リアス s i d e・・・

部室には私を除いて木場しかいなかった。

ほかの皆はそれぞれ仕事へ向かっている。

しかし、

「それにしても、イツセー君とマリさんは遅いですね。」

そう、イツセーとマリがまだ来ていないのである。

少し心配なので使い魔を出してイツセーを探させた。

数分後、イツセーが公園に伏せている姿で見つけた。

「ん？何でイツセーはそんなところで・・・。」

とりあえず木場と一緒に公園まで転移した。

イツセーはそこにいた。

「イッセー。何で、部室にも来ないでこんなところにいるのかしら？」

しかしイッセーは反応せずただ何かを黙々と続けていた。

「イッセー君？」

木場も不思議に思っただけ。

私と木場はイッセーの近くにいて、私は肩をつかんだ。

「イッセー、何をしているの？」

イッセーが顔を上げた。

「「っ！」」

私たち二人は言葉を失った。

イッセーの顔に生気が見えず目の焦点が合っていなかった。

「どうしたの！？イッセー！？」

イッセーは何もこたえずただ地面の土を集め始めた。

何故かその土は周りと比べて黒かった。

いったい何があったのだろう。

「とりあえず戻るわよ」

そう言って木場に魔法陣を起動させた。
部室に戻ると子猫と朱乃が戻っていた。

「部長。一体どうしたんです・・・っ！」

朱乃と子猫も伊ッセーの異常な状態に気づいたらしい。

「・・・伊ッセー先輩に何かあったんですか？」

子猫が聞いてくる。

私が答えようとした瞬間、

「ま・・・り・・・。」

伊ッセーがそう小さくつぶやいた。

「マリ？マリに何かあったの！？答えなさい伊ッセー！」

私がそう強く聞くと、

「あ、ああああ。うわあああああ！！！！！！！」

いきなり叫びだし半狂乱状態で暴れたした。

「っ！木場！子猫！伊ッセーを取り押さえない！」

「はい！」

「・・・はい」

木場と子猫によって伊ッセーは取り押さえられた。

しかしまだ精神状態が落ち着かずとりあえず朱乃に処置させた。

伊ッセーの両親には『今日は勉強会で友人の家に泊まるそうです。』

と伝えた。

数分後、イッセーが落ち着いたようなので、

「イッセー。一体何があつたの？教えてちょうだい。」

イッセーは若干うつろな目をしながら、今日あつたことを話し始めた。

アーシアというシスターに会ったこと、一緒に遊んだこと、友達になったこと、

イッセーを殺した堕天使と会ったこと、そして、

「俺が人質に取られて、・・・毬が・・・光の槍で消えっ、消えっ、あああああああああ！！！！！！！！！！」

「そ、そんな・・・」

「・・・イッセー先輩。」

「・・・」

私たちは知った。マリがこの世から去ったことを・・・。

イッセーは叫んだあと気絶してしまった。

気絶したイッセーをベッドに寝かせた後、私たちは会議を開いた。

「・・・イッセーにとってこれほど辛いものは無いでしょうね・・・
私が付いていれば・・・。」

「部長。自分を責めていても意味ありませんよ。」

「・・・そうです。イッセー先輩の代わりに敵を取ってあげるのが先決です。」

「そうですね。イッセー君のためにも・・・マリさんのためにも。」

「ええ、そうですね。」

そして私たちは堕天使を倒すための作戦を立てた。
マリの復讐のために・・・。

9・復讐の名のもとに（後書き）

君「神器本当にどうしようか・・・。

とりあえず次回『天の采配』

お楽しみに！」

10・夫の采配（前書き）

今回はかなりggdggd文です。

神器は完全オリジナルです。

神器の案があつたら、どんどん感想に書いて送ってください。
ありがたく使わせていただきます。

10・夫の采配

イツセーside・・・

俺はベッドの上で目を覚ました。

あれ・・・？俺何してたんだっけ・・・。

そうだ・・・。毬が俺の前で・・・俺のせいで・・・。

「イツセー。大丈夫？」

「・・・部長」

いつの間にか部長が真横にいた。

「はい・・・。なんとか。」

「そう・・・。イツセーあなたはここにいなさい。」

「・・・部長。夕麻ちゃんのところに行くんですね。」

「・・・ええ。そうよ。」

っ！やっぱり。でも、でも！

「何でおれも連れて行ってくれないんですか！」

「イツセー。あなたは今不安定な状況なのよ。」

そんな状態のあなたを連れていっても足を引っ張るだけよ。それにあなたは何をしたいの？

マリの敵打ち？それともアーシアって言うシスターの救出？」

「……どちらでもです」

「それじゃあ、なおさら連れて行けないわ。二兎追う物は一兎も得ず。」

そんなことじゃ、どちらの目的も果たせないわよ。」

「でも！」

「でもないわ。とにかくここにいなさい。」

「嫌です！アーシアとは友達になった！毬の敵打ちもしたい！それに友達を見捨てることはできません！」

「……それはご立派ね。そういうことを面と向かって言えるのはすごいことだと思うわ。」

それでもこれとそれとは別よ。あなたが考えている以上に悪魔と墮天使の関係は簡単じゃないの。」

何百年、何千年とにらみ合ってきたのよ。隙を見せれば殺されるわ。彼らは敵なのだから」

「敵を消し飛ばすのがグレモリー眷属じゃなかったんですか？」

「……」

俺は部長を睨む。数秒睨んでいると、部長が口を開いた。

「あの子は元々神側のもの。私たちとは根本から相容れない存在なの。」

いくら墮天使のもとへ降ったとしても私たち悪魔と敵同士であることは変わらないわ」

「アーシアは敵じゃないです！」

「だとしても私にとっては関係のない存在だわ。イツセー、彼女のことは忘れなさい」

そんなこと納得できるか！

すると、部長のもとへそそくさと朱乃さんが近づく。

そのまま耳元で耳打ちをする。その顔にはいつもの笑顔が消えていた。

朱乃さんが耳元から離れると、部長もまた先ほど以上に険しい顔をする。

ちらりとイツセーをみたあと次に部室にいる全員を見渡してから言った。

「大事な用事ができたわ。私と朱乃はこれから少し外へでるわね」
んなっ！

「ぶ、部長、まだ話はおわって——」

しかし、俺の言葉を遮るように、部長の指が俺の口元へと向かった。

「イツセー、あなたにいくつか話しておくことがあるわ。
まず、一つ。あなたは『兵士』を弱い駒だと思っているわね？どうなの？」

部長の言葉に俺は頷く。

だってそうでしょう、とくに能力のない駒なんだし……。

「それは大きな間違いよ。『兵士』には他の駒にはない特殊な力があるの。」

それが『プロモーション』よ」

『プロモーション』？

「実際のチェス同様、『兵士』は相手陣地の最深部に赴いたとき、昇格することができるの。』

王』以外のすべての駒に変化することが可能なのよ。
イッセー、あなたは私が『敵の陣地』と認めた場所の一番重要なところへ足を踏み入れたとき、『王』以外の駒に変換することができるの」

何だよそれ！それがあれば状況に一番適した状態で有利に戦闘できるじゃん！！

「あなたは悪魔になって日が浅いから、最強の駒である『女王』へのプロモーションは負担がかかって、現時点では無理でしょう。」

けれど、それ以外の駒なら変化できる。

心のなかで強く『プロモーション』を願えば、あなたの能力に変化が訪れるわ」

そうなのか……。毬だったら面白がるんだろうな……。

「それともうひとつ。神器について。まずイッセー、神器を使う際、これだけは覚えておいて」

そういいながら、俺の頬をなぞる部長。

「——想いなさい。神器は想いの力で動き出すの。そして、その力も決定するわ。あなたが悪魔でも、想いの力は消えない。」

その力が強ければ強いほど、神器は応えるわ」

——想い、か。何事も最後は強い気持ちだと聞くが、それはどこにいつても変わらないらしい。

「最後にイツセー、絶対にこれだけは忘れないこと。」

『兵士』でも『王』を取れるわ。これは、チェスの基本よ。」

それは悪魔の駒でも変わらない事実なの。あなたは、強くなれるわ」

それを言い切ると部長と朱乃さんは魔法陣からどこかヘジャンプした。

教室に残ったのは俺、木場、子猫ちゃんの三人。

とにかく、俺一人でいつてやる

そうして教室をようと動いた俺に対して木場が話しかける。

「行くのかい？」

「ああ、行く。行かないといけない。」

アーシアは友達だからな。俺が助けなくちゃならないんだ。

それに……」

「それに？」

「毬の敵だ」

「・・・殺されるよ？」

いくら神器を持っていたても、プロモーションを使っても、エクソシストの集団と墮天使をイッセー君では相手にならない」

そうだろうな。でも、これだけは言える！

「それでも行く。アーシアだけは逃がす！そして毬の敵を打ち取ってやる！たとえ死んでも！」

「いい覚悟、と言いたところだけど、やっぱり無謀だ」

「だったら、どうすりゃいいってんだ！」

俺は木場に怒鳴る。

だってそうだろう！どうしろっていうんだよ。

「僕も行く」

「なっ・・・」

てつきり止めてくるもんだと思ってたのに。

「僕はアーシアさんをよく知らないけれど、君達は僕の仲間だ。

部長はああおっしゃったけど、僕はイッセー君の意志を尊重したいと思う部分もある。

それに個人的にも墮天使や神父は好きじゃないんだ。憎いほどにね。マリさんの敵とまでくると・・・自分の中のどす黒い感情を抑えきれなくてね。」

・・・コイツ、どこかで今の俺と似ている・・・。そういうことか。

俺と同じで復讐鬼・・・。

「部長もおっしゃっていたらう？」

『私が敵の陣地と認めた場所の一番重要なところへ足を踏み入れたとき、

王以外の駒に変ずることができるの』って。

これって、遠まわしに『その教会をリアス・グレモリーの敵がいる相手陣地だと認めた』ってことだよな」

「あつ」

そういえばそんな事いつた。ってことは、プロモーションの発動条件が揃っている。

「部長はキミにいつでもいいって遠まわしに認めてくれたんだよ。もちろん、それは僕にフォーローしろって意味合いだとも思うけど。部長に何か考えがあるんだろうね。じゃなければ、キミを閉じ込めてでも止めると思うよ」

・・・ありがとうございます。部長・・・。

「・・・私も行きます」

「つえ、子猫ちゃん？」

「・・・二人だけでは不安です」

・・・まじかよ。本当に、

「感動した！俺は猛烈に感動しているよ、小猫ちゃん！」

とてつもなく嬉しいぞ！

「あ、あれ？ぼ、僕も一緒に行くんだけど・・・・・・・・・・？」

放置されてなんとも寂しげに笑みを作る我らが『騎士』様。

ほうっておくな！

マリside・・・

「あれ・・・ここどこ？」

私は真つ白な部屋にいた。何もかもが真つ白な・・・。

私は確か・・・

そっか、死んだんだね私・・・。

お兄ちゃんにまだ思い伝えてなかったのに・・・。

「ぐすつ。ふ、ふええええええ・・・。」

嫌だよ・・・お兄ちゃんとまだ一緒にいたいよ・・・。

「なくな・・・。」

「ふえ！？誰？」

あたりを見渡しても誰もいない。

「見えるはずない・・・。」

でも声は聞こえる。

「あなた何者？」

「私はお前だ……。」

これはよくある。訳わからないことでごまかす人だな！

「別にそういうわけではない」

「うわっ！思考をよんできた！」

「別伸におびえる必要はない。ただ一つだけ聞きたい」

「なに？」

「お前はまだ生きたいか？」

そんなもの、

「生きたいにきまつてるじゃない！」

「それなら……。望め。」

「……そんなことでいいの？」

「もともと、お前はまだ死んでいない。」

っーどっどっどっどー！

「ここはお前の神器の中だ。死の危険がせまったとき、お前は無意識にこちらへ肉体ごと移動したのだ。」

「そうだったの……。ってことは、あなたは私の神器!？」

「そういつことだ。わが名は創始者。すべての始まりをつかさどる。」

「嘘っぱい……。」

「まあ、信じられないのも無理はない。存在するはずのないものだからな……。」

「へ？それってどういう「それよりも早くするぞ。戻りたいのだから」……そうね。」

「じゃあ心の中で強く思え！お前が望むことを！私はそれを叶えよう！」

私はお兄ちゃんの顔を思い浮かべて（帰りたい！）と、強く願った。

「そして神器の名を叫べ！」

神器の名前……。何故か私は知っている。

ワールド・オブ・ビギニング
「始まりの世界!!」

そして私は再び光に包まれた。

10・夫の采配（後書き）

君「復讐に燃えるイツセー、神器の力を手に入れたマリ。

この二人の運命はどのような展開を作り出すのか。

次回『悪意の十字架』

お楽しみに！」

11・悪意の十字架（前書き）

すごい長くなってしまいました。
すいません。

自分のオリジナル神器を出したい人はどんどん感想に書いて送ってください。

出来る限りださせていただきます。

11・悪意の十字架

イツセー side・・・

俺たちは今、教会の見える位置で様子を窺っている。

木場が言うには、気配からして、堕天使が中に必ずいるそうだ。

「これ、図面」

木場が路面に建物の見取り図らしきものを広げる。

へえ、見取り図なんて用意してたのか。

「まあ、相手陣地に攻め込むときのセオリーだよね」

・・・そうだったのか。俺はてっきり突っ込んでいくものばかり・
・・・

「聖堂の他に宿舎。怪しいのは聖堂だろうね」

木場が地図を見ながら言う。

「宿舎は無視するのか？」

「おそらくね。この手の『はぐれ悪魔払い』の組織は決まって聖堂に細工を施しているんだ。

聖堂の地下で怪しげな儀式を行うものなんだよ」

「どうして？」

俺は疑問を口にする。それを聞いて木場が苦笑を浮かべる。
うん。なんかむかつく。

「今まで敬っていた聖なる場所、そこで神を否定する行為をするこ
とで、自己満足。

神への冒瀆に酔いしれるのさ。愛していたからこそ、捨てられたか
らこそ、

憎悪の意味を込めてわざと聖堂の地下で邪悪な呪いをするんだよ」

はぐれ悪魔払いはみんなそうなのか？

あのくそ神父のフリードが信仰してた様には思えないんだけど・・・
。

「入り口から聖堂までは目と鼻の位置。一気に行けると思う。

問題は聖堂の中に入り、地下への入り口を探すことと、待ち受けて
いるであろう刺客を倒せるかどうか」

やっぱりそういうことになるよな・・・。はあ・・・。

月明かりに照らされながら、俺たちは教会の入り口で顔を見合わせ、
頷きあった。

さて、行きますかッ！！

ダッ！！

入り口を潜り、一気に走り抜ける。教会に入った時点で、敵は俺た
ちの侵入を察知するらしい。
これでもう後戻りはなしだ。

俺たちは聖堂に足を踏み入れる。中は長椅子と祭壇。オーソドック

スな聖堂だ。

いや、聖堂とかきたことないけど、イメージ的に……。

ただ、一つだけイメージと異なる点があった。十字架に磔となっている聖人の彫刻。

その頭が消し飛んでいた。

パチパチパチ……

鳴り響く拍手の音。音の方を向くと、柱の物陰からあのくそ神父が現れる。

「ご対面！再会だねえ！感動的だねえ！」

ウザいなあ。

「俺としてはあー、二度会う悪魔はいないってことになってんだけどさッ！」

ほら、俺、メチャクチャ強いんで悪魔なんて初見でチョンパなわけですヨッ！！

一度会ったらその場で解体！死体にキスしてGood-byeッ！
！それが俺の生きる道でしたッ！！

でも、おまえらが邪魔したから俺のスタンスがハチャメチャ街道まっしぐら、ダメだよねえ。

俺の人生設計を邪魔しちゃダメ！だからさ！ムカつくわけで！死ねと思うわけよ！

特にそのクソ黒髪悪魔ッ！！光速で死ぬっのッ！！このクソ悪魔がよおおおおおッッ！！」

といって、一回のセリフで喜怒哀楽をすべて表現し、一気に激昂す

るくそ神父。

かまってる暇なんてねえのに。

ブイーン

懷から拳銃と柄だけの剣を取り出し、光の刃を出現させる。

あれに斬られるとマズい。光の力で大ダメージをくらう。拳銃も同様だ。

「てめえら、アーシアたんを助けにきたんだろう？ハハハ！

あんな悪魔も助けちゃうビッチな子を救うなんて悪魔様はなんて心が広いんでしょうか！

てか、悪魔に魅入られてる時点であのクソシスターは死んだ方がいいよね！」

本当に吐き気がする糞野郎だ。

俺はとりあえず、

「おい！アーシアはどこだ！」

と聞いてみた。

まあ、こたえるわけ

「んー？その祭壇の下に地下への階段が隠されてございますヨ。

そこから儀式が行われている祭壇場へと行けますぞ！」

あつたよ！

祭壇をゆびさしながら、割と簡単に場所を吐きやがった。

とりあえずはこいつを倒して先に進む！

俺は籠手を出し、木場は権を鞘から出し、子猫ちゃんは長椅子を担

ぎ、

「・・・潰れて」

と言い、フリードに向けて投げた。

だがそれは直撃する事無く、光の剣で真つ二つにされてしまった。だがその瞬間隙ができたのを見逃す木場ではない。

木場はすぐにフリードとつばぜり合いを開始した。

そのまま二人は剣をぶつけあう。

キンツ！キャン！キンツ！

「アハハ！あんた、『騎士^{ナイト}』か！無駄のない動きだぜ。

はあ…、もう最高！これこれ。最近、こんな面白いバトルしてなくてさあ！！！！

んー！んー！！ぶつ殺す！！！！」

「だったら、本気を出させてもらおうかな。」

ゾクッ！

何だ？木場の雰囲気が変わりやがった！

「喰らえ」

先程までの声音が嘘だったかと思えるほどの低い声。

初めて目の当たりにする迫力を感じた次の瞬間、木場の剣から黒い靄もやのようなものが出て来た。

そしてそれはスグに剣全体を覆い隠す。

な、
なんだあれ！？

あれも悪魔の能力なのか！？

俺が戸惑って動けない間も変化は進み、靄は光の剣へと侵食して行く。

これには流石にフリードも驚きを隠せない。

「な、なんだよ、こりゃ！」

「
『**光喰剣**』、**光を喰らう闇の剣さ**」
ホリー・イレイザー

「て、てめえも神器持ちか!？」

あれも神器！？

しかも光を喰う剣って、モロ天使サイドにとって天敵じゃん。

悪魔の武器として重宝されること間違いないだろう。

闇は光を侵し、光は刃を形成できないほど弱々しい物へと変わった。俺はそれを好機とみて動き始める。

[illegible]

Boost!

「だからあああああ！しゃらくさいんだってば！！」

これに気付いたフリードはすぐさま標的に狙いをつける。

今しかないっ！

「プロモーション！！」
「戦車ルーク！！！！」

フリードのはなった弾丸は俺の体にはじかれる。

「んなっ！プロモーション、お前『^{ポーン}兵士』か！！」

「そうだっ！『^{ルーク}戦車』の特性は、バカげた防御力と！」

俺はフリードぶん殴る！

ドガっ！！

「バカげた攻撃力だ！」

フリードが吹っ飛んでいく。

「いつてーなあ……。ふざけんなよ。ふざけんじゃねえよくそ悪魔あああああ！！！！！」

っ！まだ立ち上がってくるのか！
でも、

「もう終わりだよ」

そう俺らはすでにフリードを囲んでいる。

「うち！囲まれたら仕方ねー。それじゃあ皆さんまたいつか！」

フリードは懷から出した何かを地面にたたきつける。

ポフッ！

煙！？

視野が段々はれてくるとそこには、

「逃げられたね……。」「

すでにフリードの姿はなかった。

「でも、それよりも先に進もう」

「……。おー」

俺たちはそのまま地下へと向かった。

奥へ進んで行くと少しデカイ扉が現れた。

「あれか」

「おそらく、奥には堕天使とエクソシストの大群が存在すると思う。
覚悟は良い？」

木場の問いかけに俺達は無言でうなづく。

出発する前からとつくに出来てる。

俺達の意味を確認した木場はドアを開けようとする。

だが、木場の手が触れる前にドアが勝手に開きだした。

部屋の中にいたのは部屋を埋め尽くさんばかりの神父達。しかも全員、光の剣を持っている。

フリードほどの使い手はいないが、この数は面倒だ。

「いらっしやい。悪魔の皆さん。」

部屋の奥から聞こえて来た夕麻ちゃんの声。
そしてその横には十字架に磔にされた金髪少女、アーシアの姿があった。

「アーシアアア！」

「・・・イツセーさん？」

「迎えに来たぞお！！！」

俺がアーシアに声をかけた途端、彼女はボロボロと涙を流し始めた。
だが次の瞬間、アーシアの体が急に光り出した。

「………… あああ、いやああああああああああ！！！」

「アーシア！？！」

「感動の対面だけど、遅かったわね。今、儀式が終わった所よ」

んなっ！じゃあ間に合わなかったのか！？

いやっ！まだだ！

俺は感情に任せて一直線に飛び出す。

だが俺が駆け寄ろうとするのを阻むやつらが出て来た。

『邪魔はさせん！』

『悪魔め！滅してくれるわ！』

『彼女を生贄にする事で世界が平和になるのだ！』

生贄だと？ふざけんな！！

「ごちゃごちゃと訳わかんねえ事言い並べやがって――」

俺が殴りかかろうとする直前、相手は横からぶん殴られて吹っ飛んで行った。

「子猫ちゃん!？」

「私たちに構わず先に行ってください!」

「ありがとう!」

「いやああああああ……」

俺は少しずつアーシアに近付いて行くが、それより前にアーシアの体から大きな光が飛び出して来た。それを夕麻ちゃんが掴む。

「これよ、これ!これこそ、私が長年欲していた力!神器!これさえあれば、私は愛をいただけるの!」

狂気に彩られた表情でその光を夕麻ちゃんは強く抱きしめた。途端に眩い光が部屋中に埋め尽くされたが光はすぐに止み、光の中心にいたレイナーレの全身から緑色の光が発せられている。一体なにがどうなってんだ!?

「うふふ…、アハハハハハ!ついに手に入れた!至高の力!これで、これで私は至高の墮天使になれる!私をバカにして来た者達を見返す事が出来るわ!」

よくわからんが・・・。
だけど注意が行ってない今ならアジアを助けられる！

群がる奴らを吹き飛ばしながらアジアに近付き、拘束具を外して行く。

全ての拘束具を解き、落ちそうになった所を俺は受け止めた。

「・・・イ、イツセーさん・・・。」

「アジア、迎えに来たよ」

「・・・はい」

なんとか意識はあるが生気が全然感じられない。

まさかあの光が奪われたからか？

「教えてあげる。神器セを抜かれた者は死ぬしかないわ。その子、死ぬわよ」

「——っ！だつたら神器を返せ！」

「返すわけないじゃない。これを手に入れる為に私は上を騙してまでこの計画を進めたのよ？」

あなた達も殺して証拠は残さないわ」

「・・・くそ、夕麻ちゃんの姿が憎いぜ」

でも元カノと共に毬の敵。

そん俺の言葉を聞いた夕麻ちゃんは浮かべていた冷笑を崩し、高笑いする。

「ふふふ、それなりに楽しかったわよ。あなたとの付き合いわ」

「・・・初めての彼女だったんだ」

「ええ、見ていてとても初々しかったわ。女を知らない男の子はからかい甲斐があったわ」

「・・・大事にしようと思ったんだ」

「うふふ、大事にしてくれたわね。私が困った事なら、即座にフォローしてくれた。

私を傷付けないように。でも、アレ全部私がわざとそういう風にしてたのよ？

だって、慌てふためくあなたの顔が可笑おかしなんですもの」

「・・・初デート、念入りにプランを考えたよ。絶対に良いデートにしようって思ったから」

「アハハハ！そうね！とても王道なデートだったわ！おかげでもつまらなかったわよ！」

「・・・夕麻ちゃん」

「うふふ、あなたを夕暮れに殺そうって思ったから、その名前にしたの。

素敵でしょ？ねえ、イツセーくん。妹さんだって夕暮れに殺してあげたんだから。」

その言葉を聞いた瞬間、俺の中で何かが切れた。

「レイナーレエエエエエエエエエエエエエエエエエッ!!」

「アハハハハ!腐ったクソガキが私の名前を気安く呼ぶんじゃないわよ!」

俺はレイナーレにとびかかろうとする。
だが、

「イツセー君!気持ちはわかるが、彼女を外に出してあげるのを優先して!」

「ッ!わかった」

確かにそうだった・・・。

「よし、子猫ちゃん!イツセー君のために道をあけるよ!」

「・・・はい!」

そう言つて子猫ちゃんと木場によつて、道が開かれた。

アーシアを抱えて俺はそのまま外へ向かう。

「木場!子猫ちゃん!死ぬなよ!俺たち、仲間だからな!」

そして俺は外に出たアーシアはどんどん弱弱しくなっていく。
アーシアは俺の手を握つてほほ笑んだ。

「・・・私、少しの間だけでも・・・友達が出来て・・・幸せでした・・・」。

「・・・もし、生まれ変わったら、また友達になつてくれますか・・・？」

「そんなこと言うなアジア！これから楽しい所に連れてってやるから！カラオケだろ！ゲーセンも！そうだ、ボウリングも行こうぜ！他にもそうだ、アレだよ、アレ！ほら！」

「・・・と、強がって見たが内心、泣けるものならボロボロと涙を流したい。」

叫べるのなら大声を喉が潰れるほど出したい。

だがこれから死ぬ者にそれはただの負担にしかない。
直感的に、もうアジアが助からない事を俺は感じ取っていた。

「・・・きつと、この国で生まれて・・・イツセーさん達と同じ学校に行けたら・・・」

「行こうぜ！俺達の学校に来いよ！」

「・・・私の為に泣いてくれる・・・もう、何も・・・ありがとう・・・」

その言葉だけを残して、アジアは完全に息を引き取った。
なんでだよ何で・・・。

「なあ、神様！」

俺は叫んだ。

「神様、いるんだろう！？悪魔や天使がいるんだ、神様だっている

んだよな！？

見ているんだろう！？これを見ていたんだろう！？」

俺は必死に天に向かって叫ぶ。

だが返ってくるのは木霊した自身の声のみ。

「この子連れて行かないでくれよ！頼む！頼みます！

この子は何もしてないんだ！ただ、友達が欲しかっただけなんだよ！ずっと俺が友達でいます！

だから、頼むよ！この子にもっと笑って欲しいんだ！なあ、頼むよ！神様！」

何で神様は俺からいろんなものを奪っていくんだ！
そうしていると、

「あら、まだこんな所にいたの？ノロマねえ」

後ろからレイナーレの声が聞こえた。

振り向くと、レイナーレの体に一筋の傷がはいっていた。

「見て。ココに来る途中、下で『騎士^{ナイト}』の子にやられてしまった傷」

悠然と俺達の前に現れたレイナーレは徐に手を傷口に当てると、淡い緑色の光が傷を癒していく。

おい、その力……。

「見て、素敵でしょう？どんなに傷付いても治ってしまう。」

神の加護を失った私たち堕天使にとってあの子の神器は素晴らしい贈り物だったわ」

やっぱり、アーシアの能力か！！

「墮天使を治療できる墮天使として、私の地位は約束されたようなもの。」

偉大なるアザゼル様、シエムハザ様、お二方の力となれるの！こんなに素敵な事は無いわ！

ああ、アザゼル様……。私の力を、私の力をあなた様の為に――」

「知るかよ」

俺にとってそんなこと心底どうでもよかった。

「墮天使だとか、神様だとか、悪魔だとか……。そんなものの子には関係なかったんだ。」

周りにとにかく言われる事無く、静かに暮らせる事も出来た」

「無理ね。異質な神器を有した者はどこの世界でも組織でも爪弾つまはじき者になるわ。」

強力な力を持っているが故。他者とは違う力を持っているが故。

ほら、人間ってそういうの毛嫌いするでしょ？こんなに素敵な能力なのにな」

ああ、そうさ。

俺達人間は本能的に異物を排除しようとする。

それがまっとうな人としての判断だが、俺はそれほど人間が出来て
いるわけじゃない。

「……なら俺が、俺達がアーシアの友達になつてやる」

「アハハハハハ！無理よ！だって、死んじやったじゃない！あな

たは守れなかったの！

夕刻の時も、さつきも！その子を救えなかったのよ！自分の妹すら守れなかったのに！

本当におかしな子！おもしろいわ！」

「だから許せないんだ。お前も、そして俺も——」

だから、だから！

「返せよ……。アーシアを返せよおおおおつ——」

『Dragon booster!!』

俺の神器から機械的な音声を発して、嵌められた宝玉がまばゆい光を放つ。

『Boost!!』

「いくぞ！レイナーレエエエエ——」

俺はレイナーレに向かってパンチを繰り出す。

しかし、レイナーレは簡単に避けて光の槍を放ってきた。

ザシュツ！

「グアアアア——」

光の槍が俺の太股に刺さる。

いつてエエエエ！

痛い……。脳みそが溶けてしまいそうくらい痛い……。

でも、これを毬はかなりの数をくらっていたんだ。
あいつの痛みに比べたらこれくらい！
俺は光の槍を抜いた。

ジュボツ！

俺の太股からとめどなく血が出てくる。

「へえ、大した物ね。でも所詮そこまで！ いずれ貴方は死ぬわよ？」

「・・・からなんだよ。だから何だつてんだよおおお!!それが
どうした!死にそうだから何だ!
こんな程度でテメエをぶつ飛ばせるなら!」

足を踏ん張って俺は立ち上がる。

「安いもんだろがああああー！！！！！」

Boost!!

俺の脚はプルプル震えている。

涙も鼻水も出てる。

本当につらい。

「なあ、こんなとき誰にお願いしたらいい？」

神様はだめだ。アーシアを助けてくれなかった。

俺は悪魔だから魔王様かな？魔王様ならお願い事聞いてくれるでしょ。」

「いきなり何言ってるの？」

「魔王様、俺、今からこいつぶっ飛ばします。
見ていてください。アーシアと毬の敵を打ちますから。」

『Boost!!』

「・・・アーシア、毬、絶対あいつをぶっ飛ばしてやるから！だから見ててくれよ！」

『Explosion!!』

体の底からとてつもなく強い力があふれ出てくるのを感じる。
それと同時にこれは1発だけのものということも感じていた。

「あ、あり得ないわ！何で？さっきまであんなに弱かったのに！
な、何でよ、私の力を超えてるじゃない！」

お、おかしいわよ、この力は中級、いや上級悪魔のそれ・・・」

俺は一步一步踏みしめるように歩く。
血がとめどなく出てくる。

「嘘よ！こんなの嘘！私は究極の治癒を手に入れたの！
至高の存在に至ったのよ！？アザゼル様に愛される資格を得たのよ！
貴方のような下級悪魔に！」

レイナーレが再び槍を形成して投げつけるが無造作に放った俺の横
風ぎの拳により難なく消し飛ぶ。

「い、いや！」

逃げようとするレイナーレ。

逃がすか！

俺はその手を捕まえようとした瞬間、

「あれあれ？どうやらピンチ臭いですね。レイナーレ様？」

「フリード！いいところに来たわ！そいつを止めて！」

ッ！ヤバい！

「あいあいさーってか？ぎやはははは！」

そう言っつてフリードは俺の脚に向けて光の剣を投げてきた！

ザシュツ！

無事だった足に突き刺さる。

「がああ！」

ヤバい。動こうにも動けない。どうする！？

「あはははは！驚かせて、さっさと死ね！」

特大の光の槍を俺に向かって放つレイナーレ。
これは消せない。

「くそ……。くそおおおおっお！！！！！」

俺にはかわす術がない。

敵も取れないのか！
あきらめかけた瞬間、

「お兄ちゃんをやらせるかああ！！！！！」

俺の前に誰かが立ちはだかった。
それは、その姿は、

「ま・・・り・・・？」

俺の妹。毬そのものだった。

マリスィデ・・・

私が目を覚ますとそこにはお兄ちゃん達が映っていた。
お兄ちゃんに向かって今にも光の槍が放たれそうになっている。

「何これ！」

「すまない。どうやら、神器から出る際にミスして、違う空間へ出てしまったらしい。」

「そんな！？どうすればいいのよ！」

「とりあえず、神器に再び潜って又出直すという手しか方法は「お兄ちゃん！危ない！」・・・。」

私はとりあえず暴れてみた。

「出さない！！！！！！！！！！！」

「お、落ち着け！そんなに暴れると・・・」

「だせー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

バキッ！

「んなっ！空間にひびが！あり得ない！？」

バキン！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

私はお兄ちゃんのいる空間の地面に放り出された。
出てきたのは教会の前だった。

「うわっ！あ！速くしなきゃ！」

「待て！そんな丸腰だとやられるぞ！私を使え！」

「使い方なんてわからないよ！」

「使い方は勝手に頭の中にインプットされる。」

そう言われた瞬間、私はこの神器の使い方を理解していた。
まるで使い方を昔から知っていたかのように・・・

ワールド・オブ・ビギニング
「始まりの世界」

私の体につけていた十字架が光り始める！

イルウィル・クロス
「現れる！『悪意の十字架』！！」

『コンバート
転換』

十字架が私のこぶしに纏わりつき、形を変えていく。
そして十字架は、メリケンサックとガントレットを合わせたような
形になった。

「その力なら大丈夫だろう。って話聞いているか!？」

「うおおおおお!!!」

お兄ちゃんが危ないんだ急がなくちゃ!!!
そして、お兄ちゃんに向けて光の槍が放たれる瞬間、

「お兄ちゃんをやらせるかああ!!!」

私は割り込むことに成功した。

「ま……り……?」

お兄ちゃんの声を聞いて抱きつきたくなるが、それをこらえる。
私の拳は今も光の槍を受け止めている。

「吸い込めエエエエ!」

そう叫ぶと、光の槍がどんどん小さくなっていく。

「な、何!?何が起きてるのよ!?あなたは死んだはずでしょ!」

「残念ながらお兄ちゃん残して死ねないんで、ねっ!」

私は光の槍を砕く。

「毬……。本物か？」

「そうだよ。お兄ちゃん。」

「よ、よかった……。本当に。」

「泣くのはいいけど、この二人を倒さないと……。
お兄ちゃんを傷つけたんだそれ相応の地獄を見せないとね……。」

拳に付けた神器が黒く染まっていく。

「染まれ」

私がそう言い放つと私の体を黒い靄が覆い尽くす。

靄が晴れると私は黒いシスター服になり、武器が黒い十字架の剣に
なっていた。

「はっ！この前の借り換えしてやるよ。このくそ悪魔ああっあ！」

フリードが私に突っ込んでくる。

「ダッラア！！！！！！！！！！」

私は剣を横なぎに振るう。

その瞬間黒い衝撃波が剣の先から弧を描いて放たれ、フリードにぶ
つかり、

べ、別に面倒になったわけじゃないんだからねっ！

・・・お兄ちゃんこういうキャラ好きかなあ？

色々あった後、小猫ちゃんがズルズルと何か引きずって現れた。

「部長。もってきました」

そういつてリアス部長に報告する小猫ちゃん。

子猫ちゃんの引きずってきたものはあの墮天使だった。でも何で？

レイナーレに水を吹っ掛ける。

水を吹っ掛けられて目を覚ますレイナーレ。

「ゴホッゴホッ！」

「ごきげんよう、墮天使レイナーレ」

「・・・グレモリー一族の娘か・・・」

「言っておくけど私には協力してくれる墮天使がいるわ」

「・・・悪いけどそいつ等は死んだわ」

「嘘よっ！！」

リアス部長は懷から黒い羽を三枚取り出し、レイナーレの前に落とした。

「あなたならわかるでしょう？あなたの言った協力者の羽よ。」

レイナーレはどんな青ざめる。

「そうだね。イツセーの神器はただの龍の手じゃないわ。」
トウワイス・クリティカル

「そうなんですか？」

「イツセーが持っているのは――『フーステッド・ギア赤龍帝の籠手』って言えば分かるかしら？」

「あ、あの！？ 使い方次第で神、魔王すら屠れるという忌々しき神器がこの子に！？」

「そう、十秒ずつに力を倍にしていく力。でも、倍加させていく間を敵は待ってくれない。今回は敵が油断していくからうまくいったのよ」

あ、お兄ちゃんくぎ刺された。

「さて、じゃあ死になさい。」

「イツセーくん、私を助けて！悪魔が私を殺そうとしてるの！私と一緒に倒しましょう！ねえ！？」

っ！まだこの女……。

「グッバイ。俺の初恋。部長、もう限界ッス。頼みます……」

「待ってください。私に少しやらせてください。殺すのはリアス部長。お願いします。」

「……ええいいわよ。」

「ありがとうございます。」

私は悪意の十字架を消して、

「作り出せ！ 始まりの世界」

新たに違う神器を作り出す。

「現れる強奪の魔手！」

私の右手に十字架が集まるすると銀色の十字架が手の甲に付けられた手袋が現れた。

私は右手でレイナーレの顔面をつかむ。

「奪え」

「ん！？ん——！！！！！！！！！！」

レイナーレがわめき散らすが次第におとなしくなり動かなくなった。はなすとそこには何の感情も残っていないレイナーレの顔があった。

「一体何をしたのマリ？」

「あ、はい。この神器でレイナーレから感情を恐怖以外すべて奪つたんです。」

「な！そんなことしたの！？」

「はい。これが私の復讐です。」

そう言って私は座った。

「あと・・・お願いします」

「ええ、消し飛べ」

そしてレイナーレは消え去った。
ん？消え去った後に緑色の光があるこれって、

「これはアーシアの神器よ」

やっぱり・・・でもアーシアは、

「イツセー、マリ、コレ何だと思う？」

リアス部長が持っているのは、紅いチェスの駒だった。

「それは？」

「これは『僧侶^{ヒシヨツノ}』の駒よ。彼女をこれから悪魔に転生させてみるわ」

本当！？

やった！アーシアが生き返る！

お兄ちゃんもうれしらしく顔が晴れやかになっている。

『我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、アーシア・アル
ジエントよ。』

いま再び我の下僕となるため、この地へ魂を帰還させ、悪魔と成れ。
汝、我が『僧侶』として、新たな生に歓喜せよ！』

部長は「ふう」といって、神器もアーシアに返した。

「・・・イッサーさん？」

「アーシア！」

二人は涙を流しながら抱き合っていた。

「アーシア帰ろう。」

「はいっ！」

こうして、私たちの復讐は終わった。

11・悪意の十字架（後書き）

毬「いやゝよかった。」

一「本当にな。」

君「よかったよかった。次回は『プロフィール』をやろうと思います。」

毬&一「お楽しみに」

11・5プロフィール（前書き）

書かなければならなかった・・・。

毬の神器の能力、わかっている人もいるでしょうが、温かい目で見てください。

11・5プロフィール

兵藤 毬 16歳

兄、兵藤 一誠をこよなく愛し、一誠が傷つくと傷つけたものを絶対許さない。

容姿：髪の色は黒、瞳の色も黒という日本人特有の顔。だがかわいさは、2大お姉さまに勝るとも劣らない。体格は上からjks h dじゃvかs f k lがいうs g k j（文字化け）。

毬曰くお兄ちゃんは私のものだそう。

好きなもの：お兄ちゃん・アーシア

嫌いなもの：お兄ちゃんを傷つけるもの

魔力：普通の状態で朱乃レベル。キレるとかろく現魔王レベルに跳ね上がる。

腕力：魔力を流すことにより上級悪魔を軽く超える。

スピード：上と同じ。

神器：始まりの世界
ワールド・オブ・ベギニング

能力：ストーリー上で打ち明けていきます。

・悪意の十字架
イルウィル・クロス

能力：メリケンサックとガントレットを合わせたような形。

この状態だと相手の攻撃の威力を魔力に変換して吸収する

悪意や殺意などに反応し、黒く染まっていく。

染まりきると、黒い靄が発生し、晴れると、黒いシスター服

になり、

武器が黒い十字架の剣となる。

この状態になると吸収した魔力を倍にして発することが可能。
しかし強力すぎてまだそこまで扱えない。

オイル・グリード
：強奪の魔手

能力：銀色の十字架が手の甲に付けられた手袋。

右手に装備され、この右手で触れると、触れたものから望んだものを奪うことが可能となる。

奪う際、強大なものほど時間がかかる。

ある一定量奪うと、十字架が金色に光輝き、その状態で触れて、触れたもので高めたいものを望む と、その望んだものが極限に高まる。

ただ、奪う際に魔力を有する。

11・5プロフィール（後書き）

毬「私のプロフィールだ。」

一「なあ。文字化け治さないのか？」

君「あ、あははは、（直したら殺されかなない）

次回『不死鳥の謁見』」

毬&一「お楽しみに」

12・不死鳥の謁見（前書き）

さて、今年最後の投稿です。

それではみなさんよいお年を。

12・不死鳥の謁見

マリside・・・

色々あつて結局アーシアは家でクラスことになりました！

まあ、花嫁修業というフリースに少し違和感を覚えたことは言わないでほしいな・・・。

それからという物、チラシ配りなどでもアーシアとお兄ちゃんが一緒にいることが多くなった・・・。

悔しく・・・なんてな・・・いんだから・・・ぐすつ。

アーシアが初悪魔デビューを飾った日の夜・・・。

(うるさいなあ)

お兄ちゃんの部屋からおかしな音が聞こえる。

とりあえず、壁に耳をつけて・・・。

『イツセー、私の処女をもらつて。』

・・・ハイ？

今のはリアス部長の声だ・・・。

それよりも何？ ショジョヲモラッテ？

「お兄ちゃんの貞操を奪わせてたまるかあ！！！！」

私は高速でお兄ちゃんの部屋の前まで移動し、ドアをけり破った！

「！？マリ！？」

リアス部長が驚いている。

部屋の中を見てみると、裸のお兄ちゃん（はあはあ）裸のリアス部長。

そして、見知らぬ銀髪の女性。

「・・・」

空気が凍った。

何も言えない。何故って？

だって私が空気ブレイクしちゃったみたいなんだもん！

「・・・なにはともあれ、あなたはグレモリー家の次期当主なので
すから、

無闇に殿方へ肌を晒すのはお止めください。ただでさえ、事の前な
のですから」

と、リアス部長に落ちていた上着をかぶせる銀髪。

まさかまたお兄ちゃんを狙う奴じゃないよね・・・。

私の敵意に気付いたのか、銀髪は頭を下げて、

「はじめまして。私は、グレモリー家に仕える者です。

グレイフィアと申します。

以後、お見知りおきを。」

丁寧なあいさつをいただいた。

お兄ちゃんが見とれてる・・・。

私はお兄ちゃんに近ずいてお兄ちゃんのほつぺたをつねった。
もう一方はリアス部長がつねっている。

リアス部長はそのまま、

「グレイフィア、あなたがここへ来たのはあなたの意志？
それとも家の総意？・・・それともお兄様のご意志かしら？」

半眼で聞いていた。うん。年相応の反応だね。

「全部です」

即答ですか・・・。

「そう兄の『女王^{クイーン}』であるあなたが直々人間界に来るのだから。そういうことよね。
わかったわ」

リアス部長服に手をかけ袖を通していく。

お兄ちゃんが残寝そうな顔をしてるけど無視無視！

「イッセー。さっきのことはなかったことにして頂戴」

「さっきまでのことって何ですか！」

私はリアス部長にかみつく！

だってもしかしたら！

「大丈夫よマリ。イッセーの貞操はまだ散ってないわ。」

「ならいいですけど」

「よくない!？」

お兄ちゃんが騒いでいるけどシカト。

「イッセー？まさかこの方が……。」

「ええ。そうよ私の『兵士』^{ボーン}よ」

「『^{ブーステッド・ギア}赤龍帝の籠手』、龍の帝王に憑かれた者……。」

ん？そんなに異質なのかな？

お兄ちゃんのもすごいけど、そこまで驚くものじゃないと思うんだけど。

「この話の続きは明日、私の根城でいいかしら？」

「はい問題ありません。では、明日再び訪れますので。」

「ええ、じゃあイッセー、マリ、また明日」

そう言つて、リアス部長はお兄ちゃんの頬にキスして転移していった。

ん？キス！？

「あの人はあつああ！！！！！！！！！！」

次の日

お兄ちゃんはお口三人組の二人にダブルリアットされていた。何でも『ミルたん』とかいう人が問題らしい。よくわからないな……？

「ミルたんってどういう人なの？」

「毬。お前は永遠に知らなくていい。」

お兄ちゃんが何か悟ったような顔つきで言ってきた。
？変なの。

その後ごたごたあつたが割愛。

「部長の悩みか……。多分グレモリー家に関する話だろうね。」

木場君が笑顔で答えてくる。

「朱乃さんなら知ってるよな。」

お兄ちゃんが聞いている。

そっだらうなあ。

木場君も肯定した。

部室の扉の前に着くと木場君が何かを感じたらしい。

「僕がここまで来てやっと気づくなんて……。」

目を細めて顔を強張らせる木場君。

？なんだろう？

中に入ると、部員全員とグレイフィアさんがいた。
なんか空気が重い……。

こういう空気苦手。

「全員そろったわね。では、部活をする前に少し話があるの」

リアス部長が全員の顔を見ていった。

「お嬢様。私が話しましょうか？」

それ断って、リアス部長は話し始めた。

「実はね——」

部長が口を開いた瞬間、床に描かれた魔法陣が形を変えて光だす！

「っ！フェニックス！」

え？不死鳥の？

魔法陣から炎が巻き起こる。

あっっ！

炎の中に男のシルエットが浮かんでくる。

男が腕を風ぐと炎が消えた。

「ふう、人間界は久しぶりだ」

そこにいたのは、赤いスーツの男がいた。見た目は20代前半。

なんだか、ホストっぽい。

正直に言わせてもらっと・・・キモい！！

私はこういうのは生理的に受け付けられない！

男は部屋を見渡し、リアス部長を見つけるとにやけて、

「会いに来たぜ。愛しのリアス。」

ゾゾッ！

キ、キモっ！

無理。絶対無理！

気持ち悪っ！

リアス部長は半眼で睨んでいるが、男はそんな事気にせず近ずき、腕をつかんで、

「さてリアス。早速だが、式の会場を見に行こう。日取りも決まってるんだ、早め早めがいい」

「・・・放して頂戴、ライザー」

リアス部長は低い声で腕を振り払った。

男は苦笑している。

キモい……。もう何もかもがキモい……。そう思っているとお兄ちゃんが食ってかかった。

「おい、あんた、部長に失礼だぞ。つか、女の子にそういう態度でどうよ？」

男はお兄ちゃんを睨んで、

「あ？お前誰？」

不機嫌そうだ。

「俺はリアス・グレモリー様の『ポーン兵士』の兵藤 一誠だ！」

お兄ちゃんは（どうだっ！）という顔になっている。

「ふーん。あつそ。」

そう言つてまたリアス部長に向き直る。

「つーかあんた誰よ？」

お兄ちゃんは少しいらついた口調で聞いた。

「んだあ？リアス説明してなかったのか・・・。
俺はリアスの婚約者。ライザー・フェニックス。

純潔の悪魔にして、フェニックス家の三男だ、転生悪魔。」

「こ、こんやくしゃあああつ！?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

ものすごい驚き方だよお兄ちゃん・・・。

「いやゝ、リアスの『女王^{クイーン}』に入れてもらつた茶は美味いな。」

「恐れ入ります」

朱乃先輩も気に入らないんだ。あの男のこと・・・。

そのあとお兄ちゃんがなんかエロい妄想をしていたのでたたき起している、

「いい加減にして！」

リアス部長が激昂して叫んでいた。

そのあとなんかよくわからない悪魔事情に関してグダグダと話していた。

ホントに気持ち悪い！

何か段々と空気が険悪になってきてる・・・。

「俺は君のすべての下僕を燃やし尽くしても君を連れていくぞ」

ライザーから殺気がとめどなくあふれ出ている。

皆、臨戦態勢になってもおかしくなっている。アジアは震えている。

私？一度死にかけてるから、へっちゃら、へっちゃら。

リアス部長とライザーが臨戦態勢に入る直前に仲介に入った人物がいた。

グレイフィアさんだ。

「お嬢様、ライザー様、落ち着いてください。

これ以上やるのでしたら、私も黙って見ているわけにもいかなくなります。」

そういわれて二人とも臨戦態勢をといた。

「仕方ありません。こうなったら最終手段を取らせていただきます。」

「最終手段？」

リアス部長が怪訝そうな顔している。

「はい。お嬢様とライザー様が『レーティングゲーム』にて決着をつけるのはいかがでしょうか？」

レーティングゲーム？

「爵位持ちの悪魔達が行う、下僕同士を戦わせて競い合うゲームのことだよ」

あ、そう言えば話してたな。

「つまり、お父様方は私が拒否した時のことを考えて、最終的にゲームで今回の婚約を決めようってハラなのね。

・・・どこまで私の生き方をいじくれば気が済むのかしら・・・。」

大変だなあ。貴族って。

「いいわ。やりましょう。」

「へー受けるのか。俺はすでに公式ゲームも体験しているのだが？」

「構わないわ」

「わかりました。立会人として私が指揮させていただきます」

なんかすごいことになってきた・・・。

「なあ、これで君の下僕は全員なのか？」

「だから何？」

「これじゃ話にならないな。『雷の巫女』くらいだろうな。俺のかわいい下僕に対抗できるのは。」

ムカツ。なんかむかつく。

そう思っていると、ライザーの背後から転移された女の子たちが出てくる。

えーと……。

十五人いる……。

「と、まあ。これが俺のかわいい下僕だ。」

堂々と言うライザー。

最低。女しくないじゃない。

「お、おい、リアス……。そこの下僕君。俺を見て大号泣してるんだが。」

「その子。夢がハーレムを作ることなのよ。」

リアス部長が呆れている。

「お兄ちゃんつたら……。」

本当に……。

とりあえず頭を叩いておく。

「キモーイ」

っ！誰！今お兄ちゃんをキモいって言った人！
ぶん殴ってやる！

お兄ちゃんはキモくないんだから！！

ライザーはこっちを見て勝ち誇ったような顔をして、

「ミラ、やれ」

「はい。ライザー様」

そう言つて根を構える女の子。

っ！危ない！

私はとつさに、

「始まりの世界！現れる！悪意の十字架！」
ワールド・オブ・ビギニング イルウィル・クロス

私はとつさにお兄ちゃんの前に出て根を防ぐ。

「っ！」

「お兄ちゃんを傷つけようとしたな・・・。」

私は今の威力を魔力に変換する。

「まだ、この前の墮天使の方が強いな・・・。」

「この女！」

根を持った女の子が攻撃してくる。

ずいぶん単調な攻撃すべて拳で威力を魔力に変える。

「その男の妹か。大変だなそんな雑魚の妹なんて。」

「ライザー！速く撤回しなさい！」

「何だ本当のことを言っただけだぞ。」

コイツ、コロシテヤル。
一瞬で神器が黒く染まる。

「染まれ」

黒い靄が私を包む。

「っ！？何だこれは！？」

相手側は全員臨戦態勢をとった。

私は黒いシスター服に身を包んで私は登場した。手には黒い十字架の形をした剣。

「んなっ！」

ライザーが驚いている。

それもそのはず。十字架の形をしたものを悪魔が持っているのだから。

「コノクソヤロオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

私は突っ込もうとするが、

「マリ！落ち着きなさい！」

リアス部長に抱きとめられ私は落ち着いた。

「はい……。」

「と、とりあえずは10日後にレーティングゲームを行いますので・
・。」

グレイフィアさんの声が少し震えている。なんでだろ？
そしてライザーは逃げるように出て行った。

12・不死鳥の謁見（後書き）

君「いやあゝ。疲れる・・・。」

毬「今年もあと数時間だね。」

一「そうだな」

君「次回『いざゆかん！強化合宿！』

君&一&毬「それでは、よいお年を！！！！」

13・いざゆかん！強化合宿！（前書き）

あけましておめでとついでいます。

今年も末長くよろしく願いします。

13・いざゆかん！強化合宿！

後日。

私たちは今山にいます！

「ヤッホー！！」

『ヤッホー！！』

おおっ！山彦が帰ってくる！

「ひー、ひー。」

お兄ちゃんがやつとこさで登ってきた。

お兄ちゃんは自分の荷物＋リアス部長の荷物＋朱乃先輩の荷物を持っている。

リアス部長曰く、『これも修行の一環』だそうだ。

「お兄ちゃん！頑張ってる！」

私は櫓を飛ばして先に進む。

私の荷物は何が入っているか分からないけどお兄ちゃんの二倍くらいの大きさがある。

子猫ちゃんと同じくらいである。

「部長、山菜を摘んできました。夜の食材にしましょう。」

「おおっ！木場君、気が利く！」

木場君とそう話していると、

子猫ちゃんがお兄ちゃんを抜いていた。

それからは子猫ちゃんに対抗してお兄ちゃんもスピードアップ。

しばらくして、私たちは山頂に着いた。

そこでみんなでジャージに着替えてそれぞれ修業を開始した。

まずは木場君。

「うおおりゃあ！どおおりゃあああ！」

お兄ちゃんがぶんぶんと木刀を振り回しているが木場君は華麗に捌き、

後ろから迫っていた私の突きをギリギリでかわす。

そのあと一定距離をとる木場君。

「イツセー君。君はもっと周りを見た方がいい。マリさんはなかなか上手いよ。」

やった！木場君に認められれば剣では問題ないな。

子猫ちゃん。

「うおおおおお！！！！！！！！！！」

「・・・フン！」

お兄ちゃんはまた突っ込んでいき、投げ飛ばされ近くの木に猛烈なキスを繰り返していた。

いい加減学習しようよ・・・。

私は子猫ちゃんとは引き分けた。まあ、問題ないでしょ。

「・・・打撃は体の中心線を狙って、的確かつえぐりこむように打ちこむんです。」

「なるほど・・・。よしもう一度だ!」

そのあとまた同じことになったのは言うまでもない。

朱乃先輩。

「そうじゃないのよ。魔力は体全体を覆うオーラから流れるように集めるのです。」

意識を集中させて、魔力の波動を感じるんですよ。」

私とお兄ちゃんは懇切丁寧に教えてもらっている。

何でって?どうやら私は、魔力を外に放出するのが苦手らしい。神器を使えば別だが・・・。

だから今こうして頑張っている。

「で、できました・・・。」

お兄ちゃんの手のひらの上にはコメ粒程度の魔力の球が結成されていた。

私はそれすらできていない・・・。はあ・・・。

アーシアは簡単にできていたのにな。

「朱乃さんちよつといいですか。」

お兄ちゃんは朱乃先輩に耳打ちしている。

なんだろ？

リアス部長。

「ほーら。イッセー頑張るのよ！」

「頑張ってお兄ちゃん！」

私たちはお兄ちゃんを応援してる。

私はお兄ちゃんより早く終わってしまったため、お兄ちゃんを応援している。

「御苦労さまイッセー。次は筋トレね。」

お兄ちゃんはへろへろ状態だ。

「腕立て伏せ三百回ね」

リアス部長はそう言いながら大きな岩を背中に乗せてくる。

「さて二人とも頑張って」

「オースッ！！」

「ハイっ！！！！」

夜

「ウオオオっマジでうめえ！！」

今日一日の修業を終え、私たちはご飯を食っている。

「いやほんとに上手いです！朱乃さんが嫁にほしいくらいです！」

いいな。朱乃先輩……。私は基本料理が苦手である。

作ると上手くも不味くもないという微妙な立ち位置の料理が出来上がる。

本当にうらやましい。

アーシアもスープを作っていたらしく、色々と話しあっている。

リアス部長がお兄ちゃんはこの中で一番弱いからよける力をつけろと話していた。

「マリ。そう言えばあなたの神器の能力は何なの？」

「あ、そう言えば俺も知らなかった。」

あー。そう言えば誰にも話してなかったっけ……。

「えーと。ワールド・オブ・ビギニング 始まりの世界は、神器を作り出す神器ですね。」

カランツ。

皆がいきなりこちらを凝視してきた。

びっくりして私は箸を落としてしまっていた。

「え、えーと。マリそれは本当？」

「え、ええ。あ、でも作れるのは1日に一回だけです。作った物ならいくらでも出せますが……。」

「そんな神器聞いたことないわ。」

え！？そうなの？

『だから言ったる。私は存在するはずのないものだ』
あ、そうなんだ。

「でもそれは強い武器になるわね。」

「そうですね。」

「・・・スゴイ」

「妹に負けた気がする・・・。」

「イツセーさん落ち込まないで。」

「そうだよお兄ちゃん。」

そのあと色々話をし、

「さて風呂にでも入りましょうか。ここは、温泉があるのよ。」

「おおっ！温泉！」

すごいっ！嬉しいな。

「僕は覗きはしないからね。」

木場君がくぎを刺す。

「あらイツセー私たちの入浴を覗きたいの？」

はああ。お兄ちゃん。常識的に考えてそれ犯罪

「じゃあいつしょに入る？」

を超えた思考の持ち主がいたあああああああああ！……！！……！！

え！いやだめじゃないの。

お兄ちゃんもそんなうれしそうな顔しない！！

「朱乃はどう？」

「別にかまいませんわよ。」

っ！なんと！いいのかな？

「私もいいですよ。」

アーシアもOKを出していた。
じゃあ、

「私はいいよ。」

「うおおおおおおおおおおお！……！！……！！……！！」

「子猫は？」

「……嫌です。」

あ、お兄ちゃん撃沈してる。

「そう。残念ねイツセー。」

そう言つて女子たちは皆風呂へと向かった。
お兄ちゃんの叫びが聞こえたが気にしない。

次の日は勉強も含めていろんなことをやった。
私は新しい神器を生み出した。
これはなかなかに強力だ。

こうして、合宿はどんどん進んでいった。
最終日。

お兄ちゃんは昨日の夜はリアス部長と寝ていた。
いい加減にキレていいかな・・・。

お兄ちゃんは神器を使用して木場君と手合わせをしていた。
お兄ちゃんはどうやら自信をなくしていたらしい。
でもどうやらリアス部長のおかげで自信がついたらしい。
よかったよかった。

そうして、私たちの修業は終了した。

13・いざゆかん！強化合宿！（後書き）

毬「一&君」あけましておめでとつございますー！」

君「いやー。あけましたね。」

一「そうだな。」

毬「まあ。今年もよろしくね？」

君「次回『開始！レーティングゲーム！』」

毬「一&君」お楽しみにー！！」

14・開始！レーティングゲーム！（前）（前書き）

すいません。

風邪をひいて寝込んでて原稿を出せませんでした。

滅多な事がない限り、早めに続きを出していきたいと思いますので
応援よろしくお願いします。

あと前後編にしました。

「あらあら、あれを実行したんですかね？」

「あれって、お兄ちゃんが朱乃先輩に相談してた奴ですか？（１３話参照）」

「ええ、触れたとき魔力を流しこんで、服だけを破くというものです。」

お兄ちゃん・・・。

「はあ・・・。」

変態化進んじやったよ・・・。

「準備完了ですわ」

「あ、はい。」

リアス部長にOKと知らせる。

するとすぐにお兄ちゃんが子猫ちゃんを連れて出てきた。

「行きます!!」

どがああああっあん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「うわっ!!!!」

すごい雷が体育館に落ち、体育館はあとかたもなく消え去った。

『ライザー・フェニックス様の『^{ボーン}兵士』3名。リタイアです。』

どうやら、あそこにいた全員やられたらしい。
そりゃそうだよな。あれで生きてたら驚きだよ。

「では、私はお先に。」

「あ、はい。」

作戦終了と共に私と朱乃先輩は別れた。

しばらく敵を探して本陣の周りを歩いていると、遠くから爆発音が聞こえた。

『リアス・グレモリー様の『^{ルーク}戦車』1名。リタイアです。』

っ!!

うそでしょ!?

子猫ちゃんがやられるなんて……。さっきの爆発音……。

「向こうの『^{クイーン}女王』か!」

「正解です。」

「っ!!!!」

いつ後ろに回ったのか、振り向くとそこには、

「こんにちは。」

「あなたは……!」

ライザーの妹。レイヴェルがいた。

「何の用？」

私は敵意むき出しで質問した。

「私は気が進まないのですが……。仕方ありません。あなたには一緒に付いてきてもらいます。」

？どついう意味だろ？
でも……。

「何されるかわからないのに、ついていけるわけないでしょう？」

「そうですねだからこそ。」

パチンっ！

レイヴェルが指を鳴らす。
すると、

ふらっ

「っ！？」

私の視界がねじ曲がった。

「少し、特別なものを使用させていただきました。少しの間眠っていてください。」

「く・・・そ・・・。」

そして私は意識を失った。

リアス s i d e . . .

外で大きな爆発音がした後、子猫がやられたという知らせが聞こえた。

「・・・だめね。」

覚悟はしていたはずなのに、実際に仲間がやられるとい怒りが私の中を駆け巡る。

でもそんなことばかりにいちいち気をまわしていたら、冷静な判断ができなくなる。

「お姉さま・・・。」

「大丈夫よ。アーシア。大丈夫」

アーシアはイッセーが傷つかないか心配なのだろう。

プルプルと震えている。

なんとかしなければ・・・。

バンッ！！

「っ!？」

「すいませんが一緒に来てもらえますか？拒否権はありませんよ。」

いきなり入ってきたレイヴェルはそう宣言した。

「拒否権がないってどういうことかしら？」

私は睨みながらそう聞いた。

「断るのであれば、あなたの兵士^{ボーン}が痛い目を見るかとなりますが？」

「っ！？まさかマリ！？」

そんな・・・。

・・・いいえ。想定できたはずよ。それをできなかった私の責任。

「わかったわ」

「お姉さま。私も一緒に」

「ええ。それじゃあ、お願いするわ」

私はアーシアを連れて、おそらくライザーが待っているであろう場所に進めた。

14・開始！レーティングゲーム！（前）（後書き）

君「ゴホッゴホッ！」

毬「大丈夫？」

君「あ、ああ。」

—「気をつけるよ？風邪こじらせると大変だから。」

君「善処する。」

毬「じゃあ、君の代わりに。次回『開始！レーティングゲーム！（後）』」

—「お楽しみに！」

君「感想・意見お待ちしてます。」

15・開始！レーティングゲーム！（後）（前書き）

かなり短い＋グダグダ文

本当にすいません。

あと、いつの間にかpV15000越え・ユニーク2500越えしていました。

本当にありがとうございます。

「あら、気がつきましたか」

ここは？

屋上みたいだけど・・・。

ドカツ！

「きゃあ！！」

っ！部長の声！

私は声がした方を見る。

そこには、ライザーと部長がいた。

見ただけで、ライザーと部長の勝負は明らかに部長の方が不利なのが分かった。

「部長！！！！」

私は動こうとするが体が動かない。

「残念ながら今は傍観していてください。」

そんな・・・。

どうすれば・・・。

そう考えていると、不意に聞きなれた声がした。

「部長おおおおお！！兵藤一誠！只今参上しましたあああああああ！！！！！！」

「「イッセー！（お兄ちゃん！）」」

「毬まで！ライザーてめえええ！！！！！！」

「ハンっ！残念だったな。もう遅い。リアス、もう投了しろ。」

「ふざけないで！」

部長がライザーの頭部を消し飛ばす。

しかし、炎が顔の形をしていき、元の状態になった。
これが・・・。

「さて、兵藤一誠。そのシスターに回復してもらったんだ。さつさとかかってこい。」

あれ？いつの間にかアーシアがお兄ちゃん達のところにいた。

「早くしろ。俺との殴り合い。望んでただろ？」

「いわれなくてもやってやる！！！！」

『Burst』

その声が響いた瞬間、お兄ちゃんの体から力が抜けて行った。

「残念だったな。お前の体力の限界が近いのは知っていたしな。」

「じゃあなんで私なんかを捕まえたの！？」

「お前にはこの戦いが終わった後俺の下僕になってもらおう。」

「「なっ!!」」

私とお兄ちゃんは絶句した。

こいつは部長だけではなく、私まで欲しているのだ。

「ふざけないで!そんなこと私が許すと思ってるの!?!」

「別に妻のものをもらって何が悪い?こいつにとってもその方が幸せだろうよ。」

「ふざけるなっ!!!私はそんなこと思ったりしない。」

「だったら無理やりにも納得してもらうか。来いよ、赤龍帝。」

「ぜってえ、お前には二人をわたさねえ!!!!!!!!!!!!!!」

そしてお兄ちゃんがライザーに突っ込んでいく。

ライザーは難なくそれを迎え撃つ。

ドガッ!バキッ!グシャッ!!

お兄ちゃんが何度も殴られて何度も立ち向かってゆく。

そして私は気づいた。

お兄ちゃんの意識がないことに……。

「やめて!もうやめて!」

「だったら、俺の下僕になるんだな。」

「……わかったよ……。」

「よかったな。これ以上殴られないで。元妹に感謝しとけ。はははははー!!!」

「マリ・・・」

「すみません部長・・・。」

「いいえ。ふがない私のためによく頑張ってくれたわ。・・・投了します。」

『リアス・グレモリー様の投了確認。ライザー・フェニックス様の勝利です。』

「ありがとうイッサー」

イッサー side・・・

ここはどこだ？

赤い空間。何だこれ・・・？

『そんなんじやお前はいつまでたっても強くはなれない』

っ！？誰だ！

脳に直接響いてくるような声・・・。

いや、これは俺の左手から・・・？

『お前はドラゴンを身に宿した異常なる存在。無様な姿を見せるなよ。「白い奴」に笑われるぜ。』

お前まさか俺の体の中にあるドラゴンっていうやつか？
例のパワーアップもお前の仕業か？

『ああ、お前が望み、俺も望み、そして「白い奴」も望んだ。
だから、新しい段階に入ったのさ。』

望む？ってか「白い奴」ってなんだよ。

『いずれ、奴はお前の前に現れる。そうさ、俺とあいつは戦う運命にあるからな。』

そうだ、ついでだ。俺の力、その本来の使い方を教えてやる。』

お前は一体・・・

『ウェルシュ・ドラゴン赤い龍の帝王、ドライグ。兵藤一誠、お前の左腕にいるものだ。』

ドライグ・・・

『負けるのもいい。死ななければ敗北も糧になる。だが、それは次に勝ってこそ意味のあるものだ。』

負けて勝って、そして勝ち続ける。そうすれば、奴とお前は出会っ

』

俺と何がどうなるってんだ・・・

『そのうちわかるさ。その日のために強くなれ。俺はいつでもお前に力を分け与える。』

だが、それは大きな犠牲を払うと頭に入れておくといい。

なに、犠牲を払うだけの価値をお前に与えてやるさ。嘲笑った連中

に見せてやればいい。
「ドラゴン」って存在をな
『

15・開始！レーティングゲーム！（後）（後書き）

今回は休ませてもらいます。

次回『赤龍帝の真の姿！創始者の開放』

16・赤龍帝の真の姿！創始者の開放（前書き）

こんばんは。連続投稿です。

この後新キャラを5人出そうと思っています。

その5人の神器を考えてください。

期日は10日の午後6時が締め切りです。

みなさんどうかご協力お願いします。

16 赤龍帝の真の姿！創始者の開放

イツセーside・・・

・・・ん。

ここは・・・さっきの空間じゃない。

俺の部屋か・・・

ライザーに負けたんだよな・・・俺・・・

「ちくしょう・・・！」

納得いかねえ・・・

部長のこともそうだが、毬のことがかなり納得がいかない。

どうする？殴りこみに行くか？

いや。場所を俺は知らないし、いつて妨害しても意味がない可能性があるし・・・

「納得がいきませんか？」

「うわっ！！！」

いつの間に！？

横にはいつからいたのか、グレイフィアさんがいた

「先ほどから話しかけていたのですが・・・」

「え？そうだったんですか？」

「はい。・・・もう一度聞きますが、納得できませんか？」

「・・・そりやできませんよ。部長のことは俺のエゴかもしれない・・・。」

でも、毬のことはいきなり決めたことじゃないですか!!
それに、泣いてたんですよ・・・。」

「?泣いてた?」

「俺が気を失う前に、部長と毬が泣いていたんです。それだけが許せない!!!」

「そうですか・・・。それならばこれをお受け取りください。」

そう言つてグレイフィアさんは魔法陣の書かれた黒い紙を一枚渡してきた。

「何ですかこれ?」

「私の主、サーゼクス様からの伝言です。」

『もしこの結果に納得がいかないのであれば、この魔法陣で私たちの場所まで来なさい』
とのことでした。」

「え!?でも・・・。」

「魔力の方は気にしないでいいですよ。これはあなた様が使えるように作られたものなので。」

「そうなんですか・・・。」

「はい。それでは失礼します。」

そう言つて、グレイフィアさんの足元に魔法陣が展開したかと思つた瞬間、

グレイフィアさんの姿は消えていた。

「イツセーさん!!」

「アーシア・・・」

グレイフィアさんがいなくなったそのあとに、アーシアが部屋に入つてきた。

「イツセーさん・・・よかった。」

どうやら心から安堵しているようだ・・・。

「アーシア、すまないな。これから行かなくちゃならない場所があるんだ。」

「リアスお姉さまのところですか?」

「っ!・・・うん」

「私も連れて行つてください!」

「それはだめだ!」

それだけはアーシアの身に危険が及ぶ。

「嫌です！さっきの戦いでは役に立てなかったんです……。だから、役に立ちたいんです」

「アーシアそれでも駄目だ。それに、役に立てなかったことなんてない。」

「アーシアは優しい。だから他人を傷つけたりしない。だからこそ、俺だけで行くんだ。二人を連れ戻しに……。」

「イツセーさん……。でしたら、必ず二人を連れ戻してきてください。」

「わかった。……そうだアーシア。あのさ（ゴニヨゴニヨ）用意できるか？」

「ええ。出来ますけど……。必要なんですか？」

「ああ。とっても。」

「わかりました。急いで持ってくるんで待っていてください。」

「ありがとう」

アーシアがいそいで部屋から出て行った。

（さてと……。さあ出で来いドライグ！用がある！）

『何だ？相棒？』

Mariside……

いま私たちは部長とライザーの結婚パーティーに来ている。

部長と木場君、子猫ちゃんに朱乃先輩と一緒にパーティー会場を巡り歩いて挨拶している。

私の交換はこれが終わった後に行われる。

「はあ・・・」

鬱だ・・・。

「本当にね・・・。」

部長が私の思考を呼んできたがそんなこと気にならないくらい、憂鬱だ。

「はあ・・・」

ハモッてしまった。

しかも、ライザーはすごい調子に乗っている。
・・・死ねばいいのに。

ざわざわ・・・

何故か騒がしくなった。

何だろう？部長と一緒に見に行くと、

私たちは見た。

一番会いたかったあの人の姿を。

「イツセー?」「お兄ちゃん?」

お兄ちゃんは息を大きく吸い込んだ。
そして、

「部長と毬の処女は俺のもんだあああつあああああつあ!!!!!!」
「!!!!!!」

叫んだ。最低な内容を。

私たち二人は顔を真っ赤にしている。

そりゃ当然でしょ!部長はまだしも私なんてずっと思いを寄せてい

た人にそんなこと言われたんだから！
そのあと、部長のお兄さんの計らいによりライザーとの一騎打ちとなった。

戦闘は割愛。
べ、別に面倒だったわけじゃないんだからね！

お兄ちゃんは左腕を代償に禁手とやらになっ
たらしい。

バランス・ブレイカー

・・・複雑な気分。

「部長、毬歸るか」

「うん」

「ええ」

まあ、いつか♪

帰ろうと思った瞬間、それは襲ってきた。

ドガア アアアアアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!

パーティ会場に衝撃が走った。

「何事だ！！」

部長のお兄さんが、

「落ちていてください。正直に言いましょう。ここがテロリストに襲撃されています。」

女子供は、逃げてください！他のものは私と共にテロリストの迎撃に向かってください。」

テロリスト！？

どうしよう!?!早く逃げなきゃ!

「リアス。お前らは逃げろ。一誠君に渡した紙を使えば逃げられるはずだ。」

「そんな！ 私たちも戦います！」

「今回はかなり危ない。とにかく逃げてくれ。」

「そんな。でも！」

ドガァアアアアアアアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!

[illegible]

「っ！しまった！」

テロリストたちが中へ突っ込んでくる。

そのほとんどがこちらに、正確にはサーゼクス様に向かってきた。

「危ない！皆ひけ！」

サーゼクス様が前に出る。

「消え失せる！」

サーゼクス様の手から黒い魔力の球が放たれ迫ってきていたテロリストを包みこんでは消滅させていく。

「すごい！」

私は夢中になってその姿を見ていた。
だから気が付けなかった。

「しねえ!!！」

後ろから来ていた敵に。

「危ない部長！」

襲いかかろうとしていた敵から部長をかばって傷を負ってしまったお兄ちゃんに。

「え？」

「くそっ！」

お兄ちゃんの腹部に刀が突き刺さっている。
そんな・・・。

「イツセー!!！」

部長がお兄ちゃんに駆け寄る。

何で？全部終わったのに何で？

何でお兄ちゃんの命が危険にさらされなければならないの？

おかしいよ……

私の体の奥から何か黒いものが。

今まで感じた事のない黒いものが湧き上がってくる。

なに……これ？

『フム……これは、まさかここで発動させるとは……。』

あなたは私の神器の中にいた……。

『お前の力が目覚めたんだ。仕方あるまい。力を解放させるぞ。』

力？

『さあ望め。望みに答えられるだけの力を与えよう』

だったら……お兄ちゃんを守る力がほしい。

絶対守れる力を……！！

『それならば唱えよ……！すべての始まりを……！』

「我はすべての原点をつかさどるものなり。」

『すべてを生み出せ！すべてを屠れ……！』

「我、すべての原点となりて……」

『「汝を始まりの世界へといざなおう……！……！……！」』

そして私の体は闇に包まれた。

16・赤龍帝の真の姿！創始者の開放（後書き）

君「いやー。新キャラ神器が思いつかん。

皆さんご協力本当にお願ひします！

次回『目覚めた真の力！いでよ創始者！その名は《ガイア》』
お楽しみに！！」

目覚めた真の力！いでよ創始者！その名は《ガイア》（前書き）

黒龍さんもうしわけありませんでした。

今回は新キャラをとりあえず形だけ出させてもらいました。
概要は後書きで。

「はい？」

「落ち着いて聞いてね。マリが消えたの。」

・・・ハイ？

マリが消えた？

「・・・あくなるほど、毬が消えたね。ハイハイってなんじゃそりやあッあ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「・・・ノリツッコミですね」

そこツツコムところ！？
てか、

「どういう意味ですか!？」

「マリがあなたが刺されたとき、妙な状態でいきなり神器を展開したと思ったら、
マリが闇に包まれて、晴れたと思ったたらそこにはもう・・・。」

「いったい何が・・・。」

そう思ってた瞬間サーゼクス様が入ってきた。

「大丈夫だったか？」

「あ、ハイ。」

「それはよかった」

どうやら心配をかけてしまったらしい。

「ところでお兄様。テロリストは・・・」

「ああ、今はどちらもこう着状態だ」

「そうですか・・・」

部長は眉をひそめている。

「でも、何で今テロなんかを？」

俺は純粹な疑問をサーゼクス様に尋ねてみた。

「おそらく、結婚パーティーで浮かれているところに突っ込んで、私を打ち取るうという魂胆だったのだろっ。」

「やっぱり・・・」

みんな納得しているようだった。
するとそこに、

「大変です！！」

グレイフィアさんが血相を変えて入ってきた。

「一体どうしたんだ！？」

「とにかく早く来てください！！」

そう言って俺たちは皆（俺は部長に肩を貸してもらって（役得！）（で外に出て、俺たちがみたのは、

「何・・・あれ・・・」

闇と評しても足りないくらいの漆黒の靄があつた。

「あれはなんだ!？」

「わかりません。でも近くに寄ろうとすると何かにはじかれてしま
うんです。」

いったい何なんだ、あれは!？

全員、その場から動くことなくただ、たたずんでいた。
しかし俺はどうしてもあれが毬だとしか感じられなかった。
そして、靄の内側から光があふれ、

五体のドラゴンとその背に立って、鎧をまとった毬の姿があつた。

「毬!？」

全員の顔が驚愕に染められた。

マリside・・・

あ、あれ？

私はいつの間にかいつかの真っ白な空間にいた。

「やあ、久しぶりだね。」

「えーと・・・創始者さんだっけ？」

「ああ、真名は《ガイア》っていうんだけど・・・。」

私の目の前に一糸纏わぬ美女がいた。

美しい銀髪が地面につきかけ、ボディバランスは最高。
お兄ちゃんがみたら理性を失いそうな人。

それが創始者だ。

「さて、始めますか。」

「え？何を？」

「生命を作り出す」

「え！？（カアア）」

「そういう意味ではない。」

「あ、何だ。」

じゃあどうやって？

「神器で作る。」

「え！？出来るの！？」

「はあ。君が先ほど発動させたものは『ルール・コマンド理の集計』。

私の力の一つだ。これを使えば、さまざまなものを作ることができる。

でも、使いすぎると自我を崩壊させるから注意してね。」

「ふん」

「では、始めるか。強く願って。何を生み出すかは君の心しだいだから。」

作る・・・。

うん・・・。力が必要。守る力が。

カチッ！

で、私と仲が良くて・・・。

カチッ！

後はお兄ちゃんの望みどおりでいいかな。

カチッ！カチッ！

「よしできた！」

「そうじゃあ、戻るよ。」

え！いいの？

「大丈夫。自我は目覚めさせた。君にも新たな力を授けたし・・・。

」

「うん！じゃあ早く戻ってお兄ちゃんを助けなきゃ！」

「ただ向こうに出ると疲労感半端ないと思うから気を付けてね」

「うんじゃあね」

そして私は光に包まれ、

気づいた時には、ドラゴンの背に乗って、純白の鎧を着けて立っていた。

ほかに、ドラゴンが4体もいる。

「疲れた・・・。」

危うく地面に落ちそうになるところを、受け止めてもらう。

「危ないですね。とりあえず、人の姿に戻りますか。」

「うん」「ああ」「ええ」「おう」

そして5体のドラゴンが五人の美女になった。

目覚めた真の力！いでよ創始者！その名は《ガイア》（後書き）

イグラ・・・男勝りな性格の美女。属性は炎・地

ブリュー・・・僕っ娘。属性は水・氷

ラグナ・・・クーデレキャラ。属性は雷・風

セイル・・・双子甘えキャラ。属性は光・時

ダユナ・・・双子ヤンデレキャラ。属性は闇・空間

全員、龍と人間の血が混ざっている。

出来たら全員分の神器をお願いします。

次回『五人の龍人！』お楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6834z/>

ハイスクールD×D 兵藤家の妹？

2012年1月9日21時47分発行